

東京大学大学院新領域創成科学研究科
社会文化環境学専攻

2020 年度
修 士 論 文

東日本大震災の津波被災地における
ローカル・アイデンティティの紡ぎ直し
—宮城県名取市閑上地区での取組みを事例として—

Re-realizing local identity in the tsunami-stricken areas of the
Great East Japan Earthquake:
Case study in Yuriage, Natori city, Miyagi prefecture

2021 年 1 月 18 日提出
指導教員 清水 亮 准教授

鳥 居 真 実 子
Torii, Mamiko

目次

はじめに	3
------	---

第1章 問題の所在

1-1. 研究の背景 ー津波被災地の復興の現在地	4
1-2. 先行研究	5
1) アイデンティティ論から集合的アイデンティティ、ローカル・アイデンティティへ	5
2) 東日本大震災後における行政主体の「復興」と住民主体の〈復興〉	7
3) 被災地とローカル・アイデンティティの結節点 ー自己を「語る」ツールとして	9
1-3. 研究の目的と手法	13
1) 研究の目的	13
2) 研究の手法	14
3) 本稿で用いる言葉について	15

第2章 閑上地区にひろがっていた生活の歴史

2-1. 閑上地区とは	17
1) 閑上地区の概要	17
2) 閑上地区の地理	19
3) 「閑上」の地名の由来	21
2-2. 閑上地区の歴史	22
1) 「漁師町」の歴史の始まり（江戸時代）	22
2) 「漁師町」としての基盤の確立（明治・大正時代）	23
3) 閑上港の近代化、漁業従事者の増大と賑わい（戦前～1960年代）	25
4) ベッドタウンとしての成長と「漁師町」の勢いの陰り（1970年代）	28
5) 地区環境の悪化と「漁師町」としての模索（1980年代～震災前）	30
2-3. 震災以前の閑上地区での住民生活	34

第3章 東日本大震災と閑上地区

3-1. 閑上地区の災害史	35
3-2. 東日本大震災後の閑上地区	38
1) 震災当時の閑上地区の様子と被災の状況	38
2) 復旧期から震災復興計画策定過程 ー「現地再建」に関するコンフリクト	42
3) 復興事業の開始から「復興達成」へ	45
4) 復興過程における閑上地区での住民生活	46

第4章 閑上地区でのローカル・アイデンティティ構築の場の変容

4-1. ローカル・アイデンティティ構築の場への着目	47
4-2. 震災前のローカル・アイデンティティ構築の営み	47
4-3. 震災後の喪失としての語り	48
4-4. 震災後のローカル・アイデンティティ構築の営みの現れ—「つなぐ」営みとして	51
1) 「継続」させていく営み	51
2) 住民による「紡ぎ直し」の営み	52
4-5. 小括：ローカル・アイデンティティ構築の営みの考察	56
1) 震災前後でのローカル・アイデンティティ構築の営みの変容	56
2) 「紡ぎ直し」の営みにおける「相互行為」と「物語」	56

第5章 ローカル・アイデンティティの紡ぎ直し—閑上復興だよりに着目して

5-1. 閑上復興だよりとは何か	59
5-2. 復興だより発行のいきさつ・経緯	60
5-3. 紙面の内容の変遷と読者からの反応	62
5-4. 「閑上復興だより」から「閑上だより」のこれから	66

第6章 総合考察：津波被災地におけるローカル・アイデンティティの紡ぎ直し

6-1. 研究の視座の確認	70
6-2. ローカル・アイデンティティ構築の営みの変容	71
1) 喪失の語りにもみる、履歴のある空間と自己のつながり	71
2) 「つなぐ」営みの現れ	72
6-3. ローカル・アイデンティティの紡ぎ直しにおける「他者」と「物語」	73
1) 紡ぎ直しにおいて語られる内容	73
2) 続いていく行為としてのローカル・アイデンティティの紡ぎ直し	74
6-4. 〈復興〉におけるローカル・アイデンティティの紡ぎ直しの意義	74
6-5. 研究の課題と今後への展望	76

参考文献	78
フィールドワーク記録	82
謝辞	83

はじめに

本稿の研究テーマへの関心は、2017年4月に、学部のゼミで初めて閉上地区を訪れた際の自身の経験に端を発する。

それまで、東日本大震災の被災地に関する報道をテレビや新聞で目にしていた一方で、実際に津波被災地を訪れ、現地で生活する・してきた方の語りを直接伺った初めての機会だった。当時の閉上地区は、かさ上げ工事が完了したものの、災害公営住宅・個人住宅の建設はまだまばらの状態だった。閉上地区の中心部に位置する日和山と呼ばれる高さ6mほどの小高い丘から見渡すと、沿岸の平野部は更地がほとんどで、真新しい災害公営住宅や水産加工工場がぽつりと建っているのが遠くに見えた。案内をしてくれた当時の公民館長は、そこに広がっていた閉上地区の景色や生活の様子（沿岸部に家々が並び、自らもそこで長く暮らしていたこと、閉上港の朝市の活気など）や、被災時とその後の避難生活、復興計画に基づく工事の現状などを語った。

私自身の目には、居住する人も減ってしまった、何もない更地に見えた一方で、語り伝える人がいるからこそ共有される、「生きられた空間」としての記憶・経験があるのだと感じられるようになった。そのような語りに加え、震災前の閉上地区の写真や、歴史を紐解いていく中で、今はないが、かつてここに確かにあった暮らしに思いを馳せた。

その後、閉上地区を訪れるたびに、道路や区画、新たな住宅・公共施設など、その景色は姿を変えていった。2019年12月のある日、名取駅から閉上地区までタクシーで移動した際、閉上地区出身だという運転手の方と話をする機会があった。自身の震災前の自宅の場所や、被災時の経験、再び閉上地区に居を構え、前年に戻ってきたことなどを話してくれた。一通り話し終えた後、信号を待ちながら、「ものすごい安全（なまちに）になったね…普段は話すことがないんだけど、閉上に行くって聞いたからね。」と、遠くを見やり、ぽつりと話した。ふるさとである閉上の姿を見ながらも、どこか距離を感じさせるような語り口だった印象が残る。

閉上地区だけでなく、東日本大震災の多くの津波被災地について、震災の記憶とその継承ということが声高に言われる。確かに、被災の経験や、それに続く避難生活などから教訓として導かれる「震災の記憶」も重要である。だが、震災直後の更地の姿や、復興計画のもと「新しいまち」がつくられていくその前、つまり、震災前から連綿と続いてきたそれぞれの地域の生活や景色も含めた、住民にとっての「生きられた空間」としての記憶は、いかにして引き継がれていくのだろうか。

第1章 問題の所在

1-1. 研究の背景 —津波被災地の復興の現在地

2011年3月に発生した東日本大震災は東北の沿岸部を中心に津波災害をもたらした。津波被災地では、被災や避難生活、復興計画・事業の進展の中で、住民の生活は流動的な変化を余儀なくされた。

東日本大震災から10年が経過しようとしている現在、津波の被害を受けた地域でのインフラの整備や住まいの再建など、行政として担ってきた「復興」は完了したとする動きも少なくない。復興庁が2013年6月から約3か月ごとに示してきた「公共インフラの本格復旧・復興の進捗状況」では、2019年6月以降、「住まいの再建は、概ね完了」としている¹。自治体としては、例えば、南三陸町は復興事業の中核を担ってきた復興推進課を2020年度で廃止し、また、本稿で事例地として扱う閑上地区が位置する名取市は2020年3月に「復興達成」を宣言した。

東北の沿岸部では、沿岸部の居住地域を高台に集団移転した地区、かさ上げ工事をして現地再建をした地区、新たに商業施設や公園などを整備した地区など、各自治体の復興計画に従って、新たなまちの姿がつけられてきた。

その「復興」が完了しつつある場所で、住民はどのように生活しているのか。そこでは、津波被災地に戻り生活をする住民の語りとして、「すっかり変わってしまった」「全く違うまちが同じ場所につくられている」ということが聞かれる。これは、特に区画整理や防潮堤の建設などにより、かつての風景や、その中で営まれていた漁業・農業の生業や、人口の変化など、震災前後での喪失を表すような語りである。

その一方で、地域ごとの伝統文化や産業、行事、自治体や住民の活動、あるいは記憶の継承などに代表されるように、震災前後の変化を乗り越え、つなごうとしていく動きも見られる。

喪失と継承という、相反する認識とも考えられるが、このような認識と、それに基づく様々な営みが、復興の重層性の中で、複雑に絡みながら展開してきたといえる。現在、震災から10年弱が経過し、被災による変化に加えて、復興が進み、「完了」することによる変化があり、そこには、生活基盤が確立してきたからこそ、住民の視点から語られる自己と地域の姿があると考えられる。

本稿では、津波被災地において、地区住民の語りを通してローカル・アイデンティティを再び構築していく営みを、ローカル・アイデンティティの紡ぎ直しとして、それがその被災地の復興にいかなる意味を有するのを見ていくこととする。

¹ 2019年6月時点で災害公営住宅の完了率は99%、民間住宅等用宅地の完了率は98%（戸数）。ただし、対象地域は、原則として福島県の避難指示解除準備区域などを除く、東日本大震災により被災した地域。

1-2. 先行研究

津波被災地における住民の視点から自己と地域の姿を語る営みをローカル・アイデンティティの紡ぎ直しと位置付け、それがその被災地の復興にいかなる意味を有するのかを考察するにあたり、本節では、先行研究を検討しながら、これまでどのような知見が蓄積され、何が明らかにされていないのかを確認していく。

具体的には、第一に、ローカル・アイデンティティという語について、アイデンティティ論を遡りながら、集合的アイデンティティと、その中の一つであるローカル・アイデンティティの位置づけを、いくつかの空間論も参照しながら整理していく。第二に、東日本大震災の被災地の復興に関して、その復興の主体がどこにあるのかという点に注意しつつ、被災地の現在において復興とは果たして何を意味するのかを見ていく。特に、地域社会学の見地に立ち、住民や地域コミュニティの〈復興〉とは何かという点を確認する。最後に、ローカル・アイデンティティについての先行研究と、東日本大震災の被災地についての研究との結節点を「ふるさとの喪失」という点に着目して見出していきたい。ローカル・アイデンティティを構築する過程において「語る」行為が有する意味を見ながら、何故被災地においてローカル・アイデンティティを問う必要性があるのかを確認する。

1) アイデンティティ論から集合的アイデンティティ、ローカル・アイデンティティへ

「アイデンティティ」という概念を本格的に学問に導入したのは、フロイト派の社会心理学者であるエリック・エリクソンである。エリクソンが、『アイデンティティとライフサイクル』で identity (同一性) という概念を確立して以降、1960年代より、「アイデンティティ」の語が広く浸透するようになった。アイデンティティが、動詞の identify (同一化する) と、identification (同一化すること) に由来していることから、アイデンティティは「同一性」を有する概念だといえるが、エリクソンは、同一性と同時に「構築性」を有するとした。つまり、アイデンティティは単に不変なるものではなく、変容し、解体し、再編される対象に対して与えられた名称であるといえる (Erikson 1959=1973)²。

その後、アイデンティティ概念は、心理学や社会学、政治哲学など様々な学問分野の議論に持ち込まれることとなる。

ここでは、1970年代の多文化主義の議論に着目する。この議論における主張として、大きく分けて、アイデンティティは変わることのない自己であり、首尾一貫して不変だとして、本質主義的に捉える立場 (チャールズ・テイラーなどに代表的) と、アイデンティティは言語的な構築物だとして、構築主義的に捉える立場 (ジャック・ラカンなどに代表的) とが見られた。

その中で、アンソニー・ギデンズは、本質主義と構築主義の中庸ともいえる立場をとり、現代社会におけるアイデンティティの特徴を「再帰的自己」として表現した。グローバルな

² エリクソンの議論については、上野 (2005)、大堀 (2010) などを参照している。

時空間においては、社会の中に既存の伝統だけでなく、代替可能な数多くの生活様式が複数の権威及び指針として存立する。そのため、人々が安定的なアイデンティティを構築することは容易ではない。したがって、人々が自己の源泉として引き受ける水脈は1つではなく、複数存在し、ときに対立する要求を抱えることになる（安達 2012）。

社会学者の浅野智彦は、このギデンズの再帰的自己を、「各人が自分自身で選択し、作り出していかなければならないものとなっているのであり、その意味でそれはつねに書き加えられ、書き直されていく自伝のようなものだ」と表現する（浅野 2005）。ここに、自分で作り出していくものという旨の表現があるように、1980年代以降、社会学や社会心理学において、自己やアイデンティティが自分自身について語る物語を通して構成される、という議論が広く関心と支持を集めるようになった³。

浅野は、これをさらに「自己物語論」として展開していく。自己物語論について、「自己は、自分自身について語ることを通して産み出される」こと、「自己物語はいつでも『語り得ないもの』を前提にし、かつそれを隠蔽している」ことの二点を、その主張として打ち出した。「自己が自己物語によって産み出される」ということは、換言すると、自分自身の人生のエピソードの選択と配列を通してはじめて「私」が現れてくるということである（自己に対する物語の先行性）。そして、そこで語られる物語とは、本質的に他者に向けられた語りである。語りの内容の選択と配列を行い、他者を「納得させる」ように語ることによって、語られた自分（過去から今に至るまでの自分）ははじめて他者との間で共有された現実となるのである。つまり、自己物語は、他者からの承認を得ることで成立するのであり、他者存在が不可欠な要素となる（浅野 2001）。

この自己を物語る行為が、他者の承認を得てはじめて成立するという点を考えた時に、物語ることは「既成の物語」を土台としていると指摘できる（片桐 2003 : 10）。そこでは、個々人の有するアイデンティティとは別に、ある集合・集団が有するアイデンティティ、すなわち、集合的アイデンティティが一定の意味を有すると考えられる。

集合的アイデンティティには、例えば、「ナショナル・アイデンティティ」や「エスニック・アイデンティティ」など、アイデンティティの語に修飾語を付した様々な表現が用いられる。ここでいう国家帰属・国籍や民族は、人格を構成する要素であり、個人の人格全てではない。したがって、「ナショナル」や「エスニック」は、ある個人のアイデンティティを形成する一要素であり、個人が保持している国家や民族に対する帰属意識とも理解されている（大堀 2010）。

こうした数ある集合的アイデンティティの中でも、個人のアイデンティティを形成する

³ 例えば、自己の構築における物語の重要性を指摘するガーゲンは、「自己にとって重要な出来事を、時間的に説明していく」ことが物語ることだとし、人々の生に意味と方向の感覚が与えられると指摘する。人生のさまざまな出来事についてその重要さの度合いは解釈によって異なり、そのような意味づけによって、出来事は順序づけられ、一つの物語として形成される（片桐 2003 : 9-10）。

要素として重要な位置を占めていると考えられるものの一つが、自己と空間の関係性を象徴するようなローカル・アイデンティティである。

この自己と空間の関係性について、桑子敏雄は、「身体の履歴」と「空間の履歴」という概念を用いながら考察している。ここでは、この二つの言葉についての桑子（1999）の文章を引用したい。

わたしがかわる空間とは、身体が配置された空間であり、この空間でのこの身体こそ「わたしの身体」である。そしてこの身体に属する指によって「これ」と指されるのがわたしである。わたしはこの身体と身体が配置された空間から逃れることができない。わたしとはこの身体と身体が配置される状況との統合である。この身体が配置された空間には履歴がある。その空間に配置をもつさまざまな事物もまた履歴をもっている。もちろんわたしも履歴をもつが、多くの事物は、わたしの履歴よりも古い履歴をもつ。古い履歴をもつ事物と現在の空間を共有しながら、わたしは存在している。

（桑子 1999 : 31）

つまり、桑子は「身体が配置」と「空間の履歴」は分かちがたく、「わたし」という自己は「空間の履歴」の中で存在する、と述べる。ひいては、ひとの人生の豊かさとは、ひとの履歴の豊かさであり、身体が配置のなかに多くの意味や解釈があることにより、ひとは豊かな空間での配置をもつ豊かな存在となるのである（桑子 1999）。

ここでいう「空間の履歴」とは、時間を組み込んだ空間のなかで生じた出来事の蓄積のことである。そのような空間における空間と自己の発見、あるいは、空間と自己のかかわりの発見こそが、自己の履歴の発見であるといえる。積み重ねられた履歴をたどり、履歴に組み込まれた体験を思い起こすとき、ひとは自分の存在を知るのである。そこには、空間と自己のかかわりだけでなく、固有の配置を持った他者の存在も忘れることはできない。個としての人間は、空間のなかでさまざまな事物やひとびととかかわりながら、自己の履歴を形成していくのである（桑子 2005）。

このように、自己と空間とは分かちがたいものであり、「場所をもつ身体がローカリティの原点」（桑子 2005 : 75）であるといえる。ここでいう空間とは、吉原直樹が指摘するように、場所や場所性のリアリティを見出すことができる「生きられた空間」として考えることができるであろう（吉原 2011）。

2）東日本大震災後における行政主体の「復興」と住民主体の〈復興〉

続いて、本項で、東日本大震災の津波被災地の復興過程における取組みに着目するにあたり、「復興」という言葉について、その後の意味を確認していきたい。

災害の被災地で用いられる「復興」という言葉は、1923年の関東大震災後に後藤新平らによって、災害後の復旧対応や都市建設を指して用いられたと考えられる。関東大震災の復

興事業の最大の成果は、土地区画整理事業を全面的に用いて道路・公園などの都市基盤を整備したことにあり、以降、土地区画整理事業を中心とした国による復興事業が、震災復興や災害復興、そして阪神・淡路大震災まで引き継がれていく（小泉 2015）。

しかし、大規模な災害後の国・行政による土地区画整理事業を中心とした都市計画復興事業は、土地の所有権をめぐる問題をはらむために、事業を推し進めようとする行政と住民との間で利害が対立することが多く、合意形成の難しさが取り上げられてきた（大矢根ほか編 2007）。

阪神・淡路大震災以降、そうした従来の復興事業に対して、公的な復興計画では、「創造的復興」というコンセプトを軸に打ち立てられてきた。これは、阪神・淡路大震災以前の災害復旧・復興とは異なり、被災地の原型復旧、改良復旧、原形復興を乗り越え、地域が自立的に発展していける「創造的復興」へ、との希望を託したものであろう。（似田貝・吉原編 2015）。

実際、阪神・淡路大震災の復興過程においては、単にもとの状態に戻すだけの「復旧」ではなく、従前に抱えていた問題の解決を内包した発展的要素を有したものとして、地区住民が様々な問題を出し合う協議の場が成立し、行政を巻き込む形で復興まちづくりなどが展開していった（清水 2008）。また、復興計画それ自体の遂行だけでなく、震災から 10 年、20 年と経過する中でも、地元の支援組織が連携し、自ら市民として復興の検証活動を行い、そこでの課題をもとにした行動計画が、引き継がれている点も特筆に値する（似田貝・吉原編 2015）。

そして、この「創造的復興」の語は、東日本大震災の被災地における復興計画でも用いられることとなる⁴。

ただ、2011 年の東日本大震災の発生から数年が経過する中で、阪神・淡路大震災で行われたような創造的復興が東北の被災地で行われていたかという点、そうとは言い難い状況であった。

その中で、地域社会学では、被災地で何が問題として生起しているのか理解すべく、時間と空間を共有しながら、最も近傍に接近する、〈近傍に寄る〉ことを通じて、被災地の現場が抱えている課題や困難を明るみにしてきた（似田貝編 2008）。

それにより、中長期的に見て地域社会の持続可能性を破壊する「復興」が行われていること（黒田 2015）や、創造的復興や経済的復興の元で、被災地には、被災者の生活再建の難しさを物語る、さまざまな分断（ディバイド）が埋め込まれた新自由主義的な復興景が広が

⁴ 2011 年 4 月に閣議決定された東日本大震災復興構想会議の開催趣旨には、「未曾有の被害をもたらした東日本大震災からの復興に当たっては、被災者、被災地の住民のみならず、今を生きる国民全体が相互扶助と連帯の下でそれぞれの役割を担っていくことが必要不可欠であるとともに、復旧の段階から、単なる復旧ではなく、未来に向けた創造的復興を目指していくことが重要である。」ということが冒頭に示された。（内閣官房、2011 年 4 月 11 日、「東日本大震災復興構想会議の開催について」<https://www.cas.go.jp/jp/fukukou/pdf/kousou1/siryou1.pdf>、2021 年 1 月 13 日閲覧）

っていることが指摘されてきた（吉原 2017）。つまり、行政主体の「復興」のもとで、被災者や地域社会に対する抑圧を生み出すような構造が被災地に存在してきた、ということできる。

しかしそれと同時に、地域社会学では、ローカルなレベルで住民が主体の生活再建やコミュニティ再建を模索する集合的な営為、住民の様々な実践活動に裏打ちされた〈復興〉も進められていることも発見されてきた（黒田 2015）。吉原は、そうした集合的な企てを行政主体の「大文字の復興」に回収されない「小文字の復興」と位置付けた（吉原 2017）。

本稿においても、行政による土地区画整理事業などを中心とした復興計画・事業などを「復興」と表し、住民主体のミクロで、ローカルに根付いた営みや取組みを〈復興〉として表現する。

ただ、このように〈復興〉の主体たる住民や地域コミュニティに、期待が寄せられる一方で、そこには数々の課題もある。大規模な災害の発生後、避難生活や仮設住宅での生活が長期化する中で、震災前に住んでいた場所での生活再建に関する意思決定が多様化するため、被災地では従前の人口水準まで人口が戻りにくい場合が多く、また避難所から仮設住宅などへと移転する過程でのコミュニティの解体も免れることができない。また、吉原は原発被災地の復興に際して、「あるけど、なかった」コミュニティという表現を用いる。ここでは、東日本大震災以前から「元あるコミュニティ」は、集落意識の衰微とともにほぼ瓦解していて、被災地の現実に照らし合わせた時に、そのコミュニティの維持はリアリティを持ち得ないことが指摘されている（吉原 2015）。

以上のように、被災地の復興は大小さまざまな計画・取組みが絡み合い、現在進行形で進みつつも、住民が主体となるような住民にとっての〈復興〉は、現在もまだ途上にあり、乗り越えなければならない数々の困難もあるということがいえる。

3) 被災地とローカル・アイデンティティの結節点 ―自己を「語る」ツールとして

東日本大震災の被災地と、ローカルや場所についての議論は、宮城県や岩手県の沿岸部の津波被災地以上に、福島県の原発被災地を事例地として、その研究が蓄積されてきた。

環境経済学では、除本理史が福島原発事故に係る原発集団訴訟を検討しつつ、原発避難者の「戻りたいけど戻れない」という言葉に、「ふるさとの喪失」⁵という含意があることに着目している。避難者にとって「戻らない」ということは、震災前の居住地域にあった数多くの要素を失うことを意味する。生活再建に際して、居住空間や一定の所得は事後的に回復可能であるが、その一方で、広い意味での環境（土地などの自然資源や景観など）をはじめとした、避難元の地に固着した諸要素は回復不可能である（「不可逆的」な変化）。福島原発事故の被害地域では、土地や家屋は代々受け継がれ、次の世代に受け渡してきたものであり、容易に代替りのものを入手することはできない。つまり、そういった環境は、代替性のない

⁵ 除本の言う「ふるさと」は、「単に“昔すごした懐かしい場所”という意味にとどまらず、人々が日常生活を送り生業を営んできた場としての“地域”」を表している（除本 2019）。

(避難先では見出せない) ものである (除本 2013)。

「ふるさとの喪失」被害は、地域レベルの被害と個人レベルの被害とが二重に発生している、として捉えられる。地域レベルの被害とは、地域においてとりむすばれていた住民・団体・企業などの社会関係、および、それを通じて人々が行ってきた活動の蓄積と成果が失われることを意味し、個人レベルの被害とは、避難元の地域にあった生産・生活の諸条件⁶が失われたことを意味する。

また、仮に帰還したとしても、住民が入れ替わってしまえば震災前のコミュニティは回復せず、「ふるさとの喪失」被害は解消されるわけではない。原発事故などによって住民の大規模な避難がある場合、地域社会を元通りにすることはきわめて困難であることも、同時に指摘している (除本 2019)。

この被災地に帰還した人々の営みについて、東北で「東北学」を提唱してきた赤坂憲雄は、以下のように記している。

とりあえずは食べ物や住むところが必要です。しかし、これからどうやってムラを再建しつつ生きていくのか、それがテーマとして浮上してくる瞬間があります。そのとき、祭りや民俗芸能や伝承といった、それぞれの地域の歴史や風土に根ざし、アイデンティティを支えている文化にたいして、あらためて関心が向くことになるのでしょう。

(赤坂 2012 : 27-28)

被災地にはきわめて多様な現実が見いだされます。地形もさまざまだし、小さなムラごとに湾ごとに、歴史も文化も風土も異なっています。この震災で、海辺の風景は大きく変わってしまった。被災地がかつての風景を取り戻すことはむずかしいのかもしれない。地域社会のアイデンティティの拠りどころとして、失なわれた〔原文ママ〕記録を復元・回復してゆく必要があります。記憶のアーカイブをつくりたい。これから先の長い時間につながっていく記憶をいかに残すか、みなで考えねばならないと思います。

(赤坂 2012 : 19)

震災直後の避難生活においては、食べ物や住むところをいかに確保するかという眼前の課題が重要となる。そして、その後の時間の経過の中で、自らが生活してきたムラをどう再建し、そこで生きていくのかというテーマが浮上する。その時に、鍵となるのが地域の歴史や風土に根ざした、アイデンティティを支える文化であり、その拠りどころとして失われた

⁶ 生産・生活の諸条件とはつまり、「日常生活と生業を営むために必要なあらゆる条件であり、人間が日々年々の営み（自然との間の物質代謝）を通じて作り上げてきた家屋、農地などの私的資産、各種インフラなどの基盤的条件、経済的・社会的諸関係、環境や自然資源などを含む一切をさす」ものである (除本 2019)。

記録を復元・回復してゆくことが必要だとしている。

ここに、被災地とローカル・アイデンティティの結節点を見出すことができるだろう。

また、赤坂は「東北学」を支える思想として内発的発展論があることを述べている。「それぞれの地域を生きる人々が、外なる人々とも交流しながら、みずからの足元に埋もれた歴史や文化や風土を掘り起こし、それを地域資源としてあらたに意味づけしつつ、それぞれの方法や流儀で地域社会を豊かに育ててゆく」営みなのである（赤坂・鶴見 2015：37）。言い換えると、東北以外の地域に住まう人々、例えば、東京に住む人の見た東北ではなく、東北のそれぞれの地域に生きる人々の視点から、歴史や文化や風土をまなざし、表現していくということだといえる。

この赤坂の議論に代表されるように、東日本大震災の被災地において、それぞれの地域のローカル・アイデンティティに関心が向けられていく。そこでは、〈復興〉の主体たる住民という考えにも通底する、そこで生きてきた人々の視点から地域を捉えるということが重視されてきた。

このローカル・アイデンティティについて、地域社会学では、大矢根淳が「地域アイデンティティ」という表現で「復興とは地域アイデンティティ再構築のプロセスそのものである」と主張した。例えば、被災直後に瓦礫の山から拾い集められた写真がクリーニング・保管され、単なる思い出を越えた不可欠な情報（かけがえのない記憶）として、損なわれた地域アイデンティティ再構築の過程における役割を担っていることなどを指摘している（大矢根 2012）。

この地域アイデンティティ、ローカル・アイデンティティについて、地域再生の文脈でその概念・使用法を検討してきたのが、大堀研である。大堀は、震災以前から岩手県釜石市を事例地としつつ、ローカル・アイデンティティ概念を検討しており⁷、震災後も同市での住民活動などの研究を続けている（大堀 2017）。

大堀（2010）では、アイデンティティがそうであるように、ローカル・アイデンティティは常に同一のものではなく、形成性・更新性を有することを指摘し、また、ローカル・アイデンティティの認識主体を個人レベル・集合レベルとして定義づけている。それを受け、大堀（2011）では、釜石市の自治体戦略に着目し、ローカル・アイデンティティを認識する主体たる「地域（社会）」として自治体を捉え、自治体のキャッチフレーズの更新などに象徴されるものを、ローカル・アイデンティティの再構築であるとしている。

この再構築には、自治体行政だけでなく、企業や住民など多様な主体が関与するものであるとしている。ただ、大堀が定義するところの住民レベルのローカル・アイデンティティが、住民の視点からなされる個人の地域に対する帰属意識などであると考えた場合に、自治体

⁷ 大堀がローカル・アイデンティティの語を用い始めた背景には、岩手県釜石市での調査結果報告である東大社研・玄田・中村らにより 2009 年に編纂された『希望学』2 巻、3 巻で、地域再生のためには「希望の共有」、「地域内外でのネットワーク形成」に加え、「ローカル・アイデンティティの再構築」の 3 点が必要という仮説が提示されたことがある（大堀 2010：143-144）。

のキャッチフレーズの更新などとしてのローカル・アイデンティティの再構築では、その意味合いが十分に内包されているとは言い難い。

また、ローカルの定義づけに関しては、深く触れておらず「検討を加える必要がある」としており（大堀 2010）、それぞれの地域に即したさらなる議論が必要だと考えられる。

最後に、災害の被災地におけるローカル・アイデンティティ及びその再構築を、前々項でみた「自己物語」とも関連させて考えてみたい。

宮本巧と渥美公秀は、新潟県中越地震の事例から、災害復興における「目標」を共有するにあたり、被災者と外部支援者が新しい現実についてのナラティブを協働構築することで創造的な復興をめざし、災害復興へのナラティブ・アプローチを提案した（宮本・渥美 2009）。

大矢根は、こういった住民主体で復興を模索する取組みについて、「物語復興」と呼び、新潟県中越地震以降、能登半島地震や新潟県中越沖地震の被災地でこの議論が活発に展開されており、その成果を期待できるとした（大矢根 2007）

ただ、被災地において「語る」行為を展開する際には、「語り得なさ」⁸や、語る主語が誰なのかといった点に注意を払わなければならない。

渥美は、阪神・淡路大震災の発生から 10 年という時点において、「語るに語り得ない、言葉にならない想いを語り伝える必要」があるとしている。「語るに語り得ないもの」を内包した震災などの体験の語りや、他者からの承認を得て安定するためには「語り得ないもの」が集合的に隠蔽されなければならない。この隠蔽のために用いられる技法の一つに、ドミナントストーリーという語りの型がある。ドミナントストーリーとは、ある社会・文脈の中で受け容れられやすい（自己）物語が定型化したものである。これを利用することにより、語り手は自分の物語にあるパラドクスをうまく隠蔽し、容易に他者の納得を得ることができる。一方で、自分の体験を既成の型にはめることにより、語り手の体験の独自性・かけがえのなさは失われ、どこにでもあるような出来事に置き換わってしまう。ドミナントストーリーに回収されない語りを顕現させるには、多様なストーリーを想定して、当事者の傍にあって微弱な語りに耳を傾け、丁寧に拾い上げていく必要がある（渥美 2004）。

これは、東日本大震災の被災地においても言えることである。吉原は、震災から 9 年が経過した原発被災地の現状をふまえ、これまで福島では、外側から被曝の悲惨さ、残酷さをあらわし訴える「被爆したフクシマを言う言葉」が圧倒的に多く、逆に被災者／避難者など内側から発せられる「被爆したフクシマが言わせる言葉」があまりに少ないことを指摘する（吉原 2020）。ここに、前述の渥美がいうところのドミナントストーリーと、それに回収されない／回収されるべきでない、「弱く小さな声」の中に見出される数々のストーリーと

⁸ 「語り得なさ」については、ホロコーストや被爆の経験など、一般にトラウマと呼ばれる経験を語らないこと、語り得ない点に見出されてきた。トラウマの経験は、自己の同一性の物語を解体する経験でもあり、自己の同一性や一貫性を確保しえない状態にもつながる（片桐 2010 : 43）。

いう構図があるといえる。

こうした過去の震災における「自己物語」と震災復興の研究が蓄積されながら、被災地における「自己物語」の可能性が見いだされつつ、その留意点も明らかになってきた。ドミナントストーリーや、「大きな復興」に回収されない個々の語りをつぶさに見ていくには、地域社会学においてその立場がとられてきたように、その被災者／避難者の〈近傍に寄る〉ことで、住民の内から発せられる声に耳を傾けることにこだわる必要があるといえる。

1-3. 研究の目的と手法

1) 研究の目的

東日本大震災の発生から10年弱が経過した現在においても、東北の被災地では、「復興」はある程度完了しているともとれるが、〈復興〉については、まだ途上にあるといえるだろう。

被災地の復興においては、ローカル・アイデンティティの再構築が重要だとされている。被災地において、〈復興〉の主体である住民の視点から、ローカル・アイデンティティはどのように構築されていくのだろうか。

その住民の視点に立った時に、震災の発生から一定の時間が経過するなかで、「語ることのできる、言葉にできる想い」が出てくるとも考えられるし、逆に、「語り得なさ」が埋没していつてしまう恐れもある。本稿では、そうしたいまこの住民の生活に視点をおいて、ローカル・アイデンティティの構築の営みを見ていきたい。

ある地区全体で、ローカル・アイデンティティの再構築がいかに行われているのか、その全体像を整理しつつ、個別の事例に着目し、それをさらに深く考察することを通じて、ローカル・アイデンティティの紡ぎ直しがいかにして可能か、ということを見ていく。

また、一口に「津波被災地」といってもその内実は地域により様々である。大堀（2010）のローカル・アイデンティティ概念は、地域再生という点では、被災地にも当てはまる部分があるが、津波被災地など個別の特性にまで触れて議論はされていない。

本稿では、津波によって多くの建物が流出し、自治体として沿岸部での現地再建を選択した宮城県名取市閑上地区での取組みに着目し、地域の特性も踏まえつつ、分析をしたい。

そこで、本稿の目的を以下のように定める。

- ・震災前後で、津波被災地におけるローカル・アイデンティティ構築の営みはどのように変容したのか。
- ・地区住民によるローカル・アイデンティティの紡ぎ直しはいかにして行われ、続いていくのか。また、そこでは何が語られるのか。
- ・ローカル・アイデンティティの紡ぎ直しは被災地の〈復興〉において、どのような意味を有するのか。

また、本稿の立場としては、閉上地区での復興計画・事業の進展自体の評価をするものではなく、あくまでこれまでの復興計画の元で、いま・ここでの住民の生活が展開しているものとして、調査及び分析・考察を行う。

以上の目的を明らかにすべく、本稿では次のように論を進める。

まず、第1章「問題の所在」で、先行研究より、アイデンティティからローカル・アイデンティティ、被災地における「復興」と〈復興〉、また、自己を「語る」という行為に着眼しつつ、被災地におけるローカル・アイデンティティ研究を概観する。その上で、問いの所在を明らかにし、本稿で目的とすることが何なのかを述べていく。また、先行研究に加え、本稿で扱う用語の定義を、筆者の解釈も交えながら確認していく。

第2章「閉上地区にひろがっていた生活の歴史」で、事例地の名取市閉上地区について、史実だけでなく住民生活も含めた歴史を中心に据えて、震災前の閉上地区に広がっていた暮らしとはどのようなものだったのか見ていく。地域資料に加えて、当時の写真や、ヒアリング調査から抽出した語りを参照しながら、立体的に閉上地区という地域を捉えていく。

第3章「東日本大震災と閉上地区」で、これまでの閉上地区が経験してきた災害史をまとめたうえで、東日本大震災後の閉上地区の様子を見ていく。具体的には、時系列で被災状況、震災復興計画の策定過程、復興事業の進行などを確認し、その復興過程において、住民生活がいかに変化してきたのかも記述していく。

第4章「閉上地区でのローカル・アイデンティティ構築の場の変容」では、閉上地区のローカル・アイデンティティを構築する場が震災前後でどのように変容したのかをいくつかの事例を挙げながら見ていく。

第5章「ローカル・アイデンティティの紡ぎ直し ―閉上復興だよりに着目して」では、閉上復興だよりと呼ばれる、閉上地区で震災以降発行され続けてきた地域紙を事例として、ローカル・アイデンティティの紡ぎ直しについてさらに深く考察していく。

最後に、第6章「総合考察：津波被災地におけるローカル・アイデンティティの紡ぎ直し」では、総合考察として、第5章までに述べてきた内容をまとめつつ、上述の目的に対する筆者の考察、および今後への課題などを述べていく。

2) 研究の手法

上記の目的について、宮城県名取市閉上地区を対象地として、フィールドワークによるヒアリング調査及び地域・郷土資料などの文献調査から得られたデータをもとに分析をする。

閉上地区におけるフィールドワークは、2019年5月から2020年12月まで6回実施している。ヒアリング調査は、現地における1対1のヒアリング調査を基本とし、場合に応じて、現地でのインフォーマルなヒアリング調査及び、オンライン上でのヒアリング調査を併用した。なお、2017年4月から2019年3月まで、早稲田大学社会科学部卯月ゼミナール在籍時の閉上地区での活動で記録したフィールドノーツも必要に応じて参照する。フィールド

ドワークの記録については、巻末に記載している。

本稿におけるヒアリング対象者は、事例として取り上げる取組みの関係者の他、スノーボール・サンプリングによって選出した。ヒアリング調査で得られたデータは、スクリプトに書き起こし、必要に応じて省略、注を加えながら、分析及び考察に用いている。本文中では、かぎ括弧での表記の他、一定の量のスクリプトを記述する場合はイタリック体で示し、その最後にヒアリング対象者及び調査実施日を記載している。

文献調査は、名取市の歴史資料や広報紙、閉上地区の個人・団体が発行した地域資料、行政が発行した復興計画や文書、新聞記事などを参照した。行政関係資料及び地区住民作成資料などと、既往研究などの文献をまとめた参考文献リストは、巻末に記載している。また、地域紙及び全国版を含めた新聞紙、各種団体のパンフレットなどの出典については、本文中の脚注に記載している。

文章内で用いている写真や地図は、出典、撮影年、撮影者などのキャプションをつけている。なお、国土地理院の発行する地図や写真は、電子地図 Web⁹のデータを利用している。

3) 本稿で用いる言葉について

本論に入るにあたり、ここではいくつかの語句について、先行研究をベースに、筆者の説明なども加えながら、その定義をしていきたい。

・ローカル・アイデンティティ

本稿では、大堀（2010, 2011）のローカル・アイデンティティの定義を用いる。

大堀は、ローカル・アイデンティティのように「アイデンティティ」の前に何らかの集合的な形容が付け加えられると、個人レベルと集合レベルの二通りの解釈が成り立つという。ローカル・アイデンティティの場合、「個人レベル」は、「個人のパーソナリティにおけるローカルな要素、あるいは地域に対する帰属意識」と定義し、地域の歴史や文化、集合的な表象などを背景に形成されるとしている¹⁰。「集合レベル」は「個人レベルのローカル・アイデンティティが比較的多くの地域関係者で共通している」と定義する。大堀はこのことから、ローカル・アイデンティティは個人レベルと集合レベルとが相関しつつ形成されるものである一方で、個人レベルと集合レベルの境界は曖昧であるという。

このことから本稿では、特別の表記のない場合には、両レベルを含む概念としてローカル・アイデンティティの語を用いることとする。

⁹ 国土地理院、<https://maps.gsi.go.jp/>、2021年1月17日閲覧

¹⁰ 大堀は、個人レベルのローカル・アイデンティティの場合、ある個人が、地域のどの要素を自己のアイデンティティとして保持するかどうかは、当該個人が選択しうべきで、少なくとも他者から強要されるべきではないと指摘する（大堀 2010）。

・ローカル・アイデンティティの構築／紡ぎ直し

大堀は、ローカル・アイデンティティの語を使用する際の注意点として、それを固定的なものと捉えた場合に同意しない個人を排除する危険性があることを指摘しており、常に形成され更新され続けるものとして捉えるべきだという。つまり、ローカル・アイデンティティは常に同一のものではなく、形成性及び更新性を有するものだとして定義する。

このローカル・アイデンティティの形成性及び更新性を念頭に置くと、アイデンティティに対して「構築」¹¹という表現が用いられるように、ローカル・アイデンティティに対しても「(再) 構築」という表現を用いることが可能であるといえる。例えば、大堀は「自治体戦略としての「ローカル・アイデンティティの再構築」」と用いている（大堀 2011）。

しかし、この「構築」という語の主語には、大堀がいう個人レベルと集合レベルが混在していると考えられる。

本稿では、事例地の地区住民によるローカル・アイデンティティ構築の営みに着目する。そして、その営みにおける「語る」行為に焦点を当て考察していくことから、「構築」に対して「紡ぎ直し」という言葉をあてて、これを定義したい¹²。

すなわち、本稿では、ローカル・アイデンティティの紡ぎ直しを「地区住民の語りを通して、(個人レベルの) ローカル・アイデンティティを再び構築していく営み」と定義する。

・復興／「復興」／〈復興〉

先行研究において、吉原（2017）や黒田（2015）などで見た通り、復興という概念については、その主体がどこにあるかという点を考慮し、いくつか表現を使い分けたい。

まず、その主体がどこにあるかを問題としない場合、もしくは行政及び住民などを含めた全体を示す場合には、カッコをつけない、復興という表現を用いる。ほかに、復興計画や復興事業など、固有の名称に復興が用いられている場合はそのまま記載する。

そして、主体が主に行政にあり、土地区画整理事業などを中心とした復興計画・事業などを「復興」とし、主体が主に住民にあり、ミクロで、ローカルに根付いた生活再建やコミュニティ再建を模索する営みや取組みを〈復興〉として表現する。これは、吉原（2017）のいう、「大文字の復興」、「小文字の復興」とも対応する表現である。

¹¹ 片桐（2003）は、「自己の同一性は、パーソナリティの不変性や発達の一貫性などの身体的な属性によって形成され説明されるのではなく、自己を同一なものとして物語ることによって構築される」としており、アイデンティティ概念においても、「アイデンティティの構築」という語に物語る行為が不可欠であることを示している（片桐 2003：124）

¹² 「紡ぎ直し」としているのは、本稿で扱う事例が、ローカル・アイデンティティを不断に構築し直していく営みだと捉えられるからである。

第2章 閑上地区にひろがっていた生活の歴史

本稿では、宮城県名取市閑上地区を事例地として扱う。そこで、本章では、ヒアリング調査などにおいて地区住民が語る「閑上地区の歴史」を念頭に置きつつ、それを客観的に捉えるための材料・資料として、文献資料などを基にその生活の歴史、地域史を述べていく。

2-1. 閑上地区とは

1) 閑上地区の概要

名取市は宮城県の南東部に位置し、現在 11 の地区から構成されている。(図 1) 東西に約 15km、南北に約 8km の市域からなり、2020 年 12 月現在で 79,655 名¹³が居住している。市の中央部を JR 東北本線、仙台東部道路が縦断しており、JR 東北本線の名取駅周辺に市の中心市街地である増田地区や杜せきのした地区が位置している。市の東部は、起伏の穏やかな仙台平野が広がり、太平洋沿岸部に閑上地区や下増田地区が位置するほか、名取駅から仙台空港へと延びる仙台空港アクセス鉄道の沿線には美田園地区などが位置する。市の西部は、高館山や五社山などのなだらかな丘陵地が広がり、平安時代から旧名取郡の信仰の中心であった熊野三山や、1990 年代ごろに分譲を開始した高台の新興住宅地である、ゆりが丘地区や那智が丘地区、相互台地区が位置する。



図 1：名取市地図（出典：名取市 2020 長期総合計画）

¹³ 名取市ホームページ、
https://www.city.natori.miyagi.jp/soshiki/soumu/soumuka/toukei/node_23735、2021 年
1 月 8 日閲覧



図 2：名取市行政区地図（出典：名取市 2015）

閑上地区は、名取市の北東端に位置し、北部を流れる名取川を挟んで、仙台市若林区藤塚地区などに接している。(図 2) 10 km²ほどの広さで、2020 年 12 月現在 3,028 人が居住する。名取駅周辺の中心市街地から、県道 129 号 閑上港線を真っすぐ西に進んだ、沿岸部に広がる地区である。



図 3：関上地区周辺地図（出典：名取市 2015）

関上地区の呼称について、名取市の行政区分によると、関上 1～7 丁目と 35 の小字から成る「関上」と、「小塚原北」、「小塚原南」、「牛野」、「大曲」、「高柳」、つまり 6 つの行政区を合わせて関上地区としている。（図 3）関上地区の境界や行政区分は、度々変更されてきたが、関上という地名（古書には洵上と表記されている場合も多い）や、おおよその位置は変わっていない。

また、行政区分とは別に、地域住民によって古くから町区、陸区（おかく）¹⁴という呼称が用いられている。主に、町区は人家の密集した関上、陸区は農業を生業とする内陸よりの小塚原、牛野、大曲、高柳を示す言葉である。町区には漁業従事者や商店を営む人（漁業との兼業も含めて）が多く、対して、陸区には稲作を中心とした農業従事者が多く、古くから町区と陸区では異なる生活が営まれていたという。

本稿では、旧来から町区と呼ばれた地域を中心に据えつつ、陸区も含めた地区全体を関上地区という呼称で扱うこととする。

2）関上地区の地理

前項で確認した関上地区の町区を中心に、その現在の地理を確認する。（図 4）

現在、関上地区は 1～7 丁目の町丁と、関上字庚申塚や関上字新鶴塚などの 35 の小字が

¹⁴ 丘区、または岡区と書いて「おかく」と読む場合もあるが、本稿では陸区の表記に統一することとする。

ら構成されている¹⁵。

まず、中央西部を縦断する県道 10 号の周辺には 1 丁目と 2 丁目、庚申塚などが位置している。ここは、被災市街地復興土地区画整理事業のもとで第一種住居地域に指定されているため、復興公営住宅（かつての災害公営住宅）の団地や戸建て住宅、関上小中学校や関上公民館などの公共施設が立ち並ぶ。

関上地区の中央東部には貞山運河と呼ばれる運河が流れており、宮下橋を渡った、これより東側に 3～6 丁目が位置している。ここには、震災前に多くの住戸が並んでいたが、被災市街地復興土地区画整理事業では工業地域に指定されているため、基本的に住戸は建っていない。震災前から残る日和山を中心に、震災後に震災メモリアル公園が整備され、名取市の東日本大震災慰霊碑が建立されている。また、内海の広浦沿いには、毎週日曜日に開催され、早朝から多くの観光客が訪れるゆりあげ港朝市や水産加工団地、みちのく潮風トレイル¹⁶の拠点施設である名取トレイルセンターが位置する。

広浦にかかる広浦橋を渡った先の関上字東須賀には、2020 年夏に開館したサイクルスポーツセンターがあり、子ども連れの家族やサイクリストが集う。その施設のすぐ東には、震災後に建設された高さ 7.2 m の防潮堤があり、その先に砂浜の海岸と太平洋が広がる。関上港に出入りする小型船や、コンクリート塀にぽつぽつと並び釣りを楽しむ人など、港町らしい光景も見られる。



図 4：震災前の関上地区地図（出典：名取市 2015）

¹⁵ 行政区としては、15 の行政区（上町北、上町南、中町、下町、新町南、新町北、関上 3 丁目、関上 4 丁目、関上 5 丁目、関上 6 丁目、小塚原北、小塚原南、牛野、大曲、高柳）から構成されている。

¹⁶ 環境省が整備する、青森県八戸市から福島県相馬市までの太平洋沿岸をつなぐロングトレイル。2019 年 6 月に全線が開通した。

3)「閑上」の地名の由来

閑上という地名の由来については諸説ある。最も古い記録では、養老3(719)年に編纂された「封内風土記」で、名取郡広浦の治兵衛という漁師が漁に出て、網を投じた際に異様な神体を拾い上げ、家へと持ち帰り日夜尊崇していたという伝説がみられる。この御神体がゆり上がった所として、広浦が「ゆり上」と呼ばれるようになった。

「閑上」という地名に用いられる「閑」の文字は、地名で使用されているのは非常に珍しい。こちらも由来については諸説あるが、仙台藩の藩主が大年寺に参拝した帰路に、山門内からはるか東の方に広がる浜を見た際に、「門の内から水が見える故に今後は門の中に水をかいて閑上と呼ぶようにせよ」と言ったことから、仙台藩の国字として「閑」の文字が用いられるようになった(名取市史編纂委員会 1977:382)。

3-2. 閑上地区の歴史

本節では、閑上地区の歴史を見ていくが、ここで、閑上地区についての住民の語りに着目したい。彼らが閑上地区について語る時には、「独特なまち」「漁師町ならではの言葉・気質」といった言葉がよく聞かれる。

例えば、以下のような語りがあある。

「(宮城県の他の港町と比べても) 閑上は独特ね。亙理とか荒浜は大人しいよね。閑上は昔から、小さな船で荒海に出て、板子1枚下は地獄だ、なんて命かけて漁に行くわけだから。そうするとそういう荒い気性があるのね。」
「閑上のまちって、すごく独特な雰囲気のもの。」

(Rさんヒアリング 2020年10月6日)

「閑上ってのはまの町で、お祭りが盛んな町だったんですよ。漁師町で。・・・昔は、田舎だってのもあるけど、横のつながりがあったんですよ。お祭りの時はたくさん人出てくるんです。ほとんど閑上の人でいっぱいだったな。」

(Fさんヒアリング 2020年7月15日)

閑上地区の住民がそれぞれ「自分にとっての閑上」やそこでの思い出・記憶を振り返った時に、このような語りが多く聞かれるのはなぜか。このような閑上地区のイメージはどのような歴史や住民生活を背景に形成されていったのか。

閑上地区の成立の起源である江戸時代からの歴史を振り返りつつ、語りの中で多く聞かれる昭和から現在にかけての歴史¹⁷を詳細に見ていくこととする。

1) 「漁師町」の歴史の始まり（江戸時代）

江戸時代、名取郡（現在の仙台市、名取市、岩沼市）は伊達藩の支配のもとにあり、郡村制が敷かれ、66の村から構成された。名取郡の代官所は長町（現在の仙台市太白区）に置かれ、飯田・日辺・今泉・種次・二木・井戸浜・藤塚・閑上浜・小塚原・牛野・大曲・高柳・四郎丸・袋原などの33村が北方、増田・下増田・杉ヶ袋・下余田・上余田・田高・手倉田・飯野坂・植松・岩沼・本郷・下野郷などの33村が南方に属した。各村には、1～3人の「肝入」が置かれ、年貢や諸役の割付・戸籍・土木普請の具申などを司った。他に、閑上浜では、

¹⁷ 語りの中に含まれる「歴史」とは必ずしも本人（ヒアリング対象者）が直接経験した出来事・時代を含むわけではない。時には、自分の父母・祖父母などの口承・思い出なども参照しながら語られる。しかし、そうした語りや物語が自己の経験を超越するという点、つまり、生涯のあいだに経験する出来事を越えた様々な知識を土台とすることによって物語を作り上げている（片桐 2003：125）ことから、昭和以前よりさかのぼって閑上地区の歴史を見ていくこととする。

船の出入があることから、主に宿駅に置かれ事務と警察関係の職務に当たる「検断」が置かれた。閑上の検断は行政事務には関知せず、主として密輸物の取締りを行った。肝入と検断は、主にその自宅が役所となった（岡崎編 1977：15；名取市史編纂委員会 1977：373）

閑上地区では、浜・港での漁業や、運河の水運を軸に、人口が定着していったと考えられる。閑上地区の漁業の発達については古い資料は残されていないが、仙台湾沿岸の砂浜が長く伸びる遠浅の海岸で、名取川や広浦を船溜まりとして、古くから漁業が営まれたとみられ、藩政時代以前から、漁業によって生計を立てていた古い漁港であったという。

藩政時代には仙台藩の直轄港として栄えた。これは、漁港としての機能だけでなく、名取川や貞山運河などの水運にも恵まれていたためである。閑上風土記には、江戸方面からの船が仙台へと向かう際には、閑上の港を経て、名取川を上り、堰場（現在の仙台市若林区、広瀬川沿い）の舟着場で発着したという当時の様子が記されており、閑上地区が、水運交通の要衝であったことが伺える。

現在の閑上地区を縦断する貞山運河は、開削当時、木曳堀¹⁸と呼ばれ、伊達政宗の命により慶長 6（1601）年頃までに掘られたと考えられている（宮城県 2016）。この木曳堀は貞山運河の中でも最初に開墾された運河であり、仙台城及び城下町建設の用材運送などに大いに役立ったといわれる。

また、閑上地区の内陸部、現在でいう陸区には、農業に適した平坦な土地を有していた。ふつう、沿岸部の土地では、塩害により米や麦など作物の栽培がしづらいが、閑上地区では、内陸部から「浜堀」とよばれる堀が引かれ、豊富に農業用水を使用することができたため、稲作を中心に農業が行われた。文禄 5（1596）年に、伊達政宗が領内の検地を行った際の資料である名寄帳には、閑上地区について、98 名の名請人ごとに年貢の額がまとめられており、他の地域と比較するとその収量は少ないものの、当時から半漁半農の集落として生活が営まれていたことが分かる（名取市史編纂委員会 1977：162）。

2）「漁師町」としての基盤の確立（明治・大正時代）

伊達藩政時代、閑上地区は肝入の支配を受けていたが、1872 年の廃藩置県後は、仙台県の直轄となり村扱伍長が村治にあたった。そして、1889 年に町村制が敷かれ、閑上浜・小塚原・牛野・大曲・高柳の 5 村が東多賀村となった。

1889 年当時、閑上浜の戸数は 380、そのうち漁業に従事するものは 280 であったが、そのうち専業漁家は 100 で、他は農業や商業との兼業であった（名取市史編纂委員会 1977：687）。

藩政末期から明治初期の宮城県の遠浅の海岸では、砂泥まじりの海底を生息地とするカ

¹⁸ 現在の貞山運河のうち名取川から阿武隈川（河口は亘理町及び岩沼市を流れる）の間の堀が木曳堀と呼ばれた。貞山は伊達政宗の追号で、明治時代に貞山運河と呼ばれるようになる。（「環境との調和めざせ（4）宮城・名取など流れる貞山運河（観光を起こす）」日本経済新聞、2006 年 9 月 12 日）

レイやヒラメが主な漁獲物で、手繰網（方言：うきぐり網）や刺網などが主な漁法だった。

明治時代に入ると、1885年ごろに閑上地区の渡辺民七氏が上町に魚問屋を操業し、それに倣う形で、中町・下町・新町・新丁といった他の部落でも魚問屋が営まれ始めた。例えば、上町の魚問屋では、10隻のカッコ船（櫓3丁・櫓4丁、8人乗りで、梶が1丈2尺（4m）あり、浮繰（うきぐり）網や刺網を使って、主にヒラメやカレイを獲る）が取引して、問屋に魚を卸していたという。この5つの部落の魚問屋が合併する形で、1905年に、旧市場内に、閑上漁業協同組合の前身である共同販売所が設立した。

大正時代に入ると、新たな漁法であり、閑上地区に特徴的な底曳漁業の発端にもなる「三河打瀬」が導入（岡崎編 1977：79）され、それ以来、底曳漁業を専業として発展してきた。この漁法の導入に加え、それまでの櫓と櫓による手漕ぎ船か帆船からエンジン船への漁船の動力化、名取川の河口の改修工事¹⁹などにより、閑上地区の漁業の生産力や漁港の機能が向上し、当時は、毎日大漁が続いたという（岡崎編 1977：369）。また、卸先も、それまでは仙台が多かったが、閑上地区に製氷会社が立地したことも相まって、福島や東京方面へと広がった。

このように、閑上地区では、漁業を中心として卸売業・商店や漁港の機能が整備され、漁師町としての基盤が着実に出来上がっていった。大正時代の終わりには、3,849人、690戸が閑上地区に居住していた。

この漁師町としての閑上地区を象徴するような当時の生活景がいくつかある。

一つ目が、沿岸部に植わる「あんどん松」である（図5）。これは、広浦の沿岸部に植えられた松林で、伊達藩政時に多くの松が植えられた。松の枝にあんどんが灯され、漁から帰ってくる人たちなどの目印になったことからあんどん松と呼ばれたという。

¹⁹ 名取川河口では土砂の堆積などで漁船の出入りが難しくなっていたため、県の容認を得て河口の改修が行われたことで、河口の位置が安定した。これを記念して、閑上地区では1924年に「通水式」という祭典を開催した。また、1920年には、閑上漁港の船の出入りや海の様子を見るために、日和山が現在の閑上4丁目の位置に築造された。日和山の頂上には、開運や航海安全などを祈願して、閑上湊神社の末社である富主姫神社が建てられた。



図 5：あんどん松

(出典：名取市図書館「名取デジタルアーカイブ」より 撮影：1996 年 撮影者：佐藤助治)

もう一つが、「閑上大漁唄い込み」及び「閑上大漁唄い込み踊」である。これは、伊達政宗が閑上浜を訪れた時に、漁師たちが大漁に挑む心意気を歌ったことから大漁唄い込みが始まったと伝えられ、大漁を喜んで、漁師らが港口から威勢よく板子をたたき、拍子を取って魚市場まで唄い込む姿が特徴的である。しかし、時代が下り、漁船が機械化・大型化するにつれて、港口では歌われなくなっていった²⁰。

3) 閑上港の近代化、漁業従事者の増大と賑わい（戦前～1960 年代）

1929 年に、東多賀村が町制を施行して、閑上町へと改称した。同じく 1929 年には、現在の位置に閑上港が整備され、港の近代化が進むこととなった。整備前の閑上の港は、名取川の河口に位置していたが、河口の土砂が多量に堆積しているため、船舶の入港や係留が困難となっていた²¹。港が近代的に整備されたことに加え、漁法が変化し、船舶の保有数も増加したため、閑上地区の漁師町としての賑わいはさらに活気づいた。戦前の閑上地区の様子を残した資料には、「例年の通り暑い晩などはひとが通りきれない位往来して閑上の東一番町格です。」(大脇 2016) とあり、多くの人で賑わう当時の様子が伺える。

昭和初期には、戦争の影響で漁獲高が減少したものの、戦後の 1940 年代後半には、町区を中心に人口・世帯数が急激に増加し、それらの人口を労働力として吸収する形で、漁業も再び活発に営まれるようになる。戦時中、沿岸漁業が操業を中止したため、魚介類の資源の繁殖・成長が妨げられることがなく、復員者や軍事工場からの帰還者を中心に豊富な労働力

²⁰ 1972 年に市の指定文化財に登録されて以降、観光資源として再び脚光をあびることになる。震災前には、保存伝承のために夏祭りにあわせて閑上大漁唄い込み大会が開催された。

²¹ 船舶の入港にあたっては、「潮待ち」と呼ばれる光景がみられた。これは、河口の土砂の堆積のために、干潮時には入港が困難で、船舶は沖合で潮が満ちるのを待って入港しなければいけなかったためである。港の整備後も、現代に至るまで見られた光景である。

も得た中で、閑上港での漁獲高はカレイやヒラメなどの底曳漁業を中心に漁獲高が増加し、1952年に底曳漁業の漁獲高はピークを迎える（岡崎編 1977：363）。また、漁師の家庭の女性は、五十集（いさば）と呼ばれる行商として、閑上港で揚がった魚やその加工品（焼きガレイが名物だった）を、かごに背負って、紺の着物に濃紺の前掛け、真っ白い手ぬぐいをかぶって運河沿いから仙台方面などへ売り歩いていった。五十集は、閑上地区以外の地域から嫁に来た女性たちがとくに熱心に行い、彼女たちの実家や出身地が売り歩く絶好の場になった（沼田 2014）。



図 6：閑上漁港に並ぶ小型船

（出典：名取市図書館「名取デジタルアーカイブ」より 撮影：1965-1975 年）

当時は、閑上地区と名取川の対岸の仙台市を結ぶ橋は架かっておらず、名取川の渡し船で人や物資の輸送が行われた。（図 8）この渡し船は、閑上大橋が架橋する 1972 年ごろまで見られ、閑上地区の海産物が仙台方面へと運ばれていく代わりに、農村集落であった対岸の藤塚地区からは野菜などが運ばれ、閑上地区の町区の商店で売り買いされた。



図 7：閑上地区のまちなみ

(出典：名取市図書館「名取デジタルアーカイブ」より 撮影：1958 年)



図 8：名取川 閑上地区と藤塚地区間の渡し船

(出典：名取市図書館「名取デジタルアーカイブ」より 撮影：1972 年)

行政区分としては、1955 年、増田町、閑上町、下増田村、館腰村、愛島村、高館村の 2 町 4 ヶ村が合併して、名取町となり、その後、1958 年に市制へ移行し、名取町から名取市へと改称した。1950 年代には、新制の中学校の開校や、上下水道の整備なども含め、大規模にインフラ整備が進められた。

4) ベッドタウンとしての成長と「漁師町」の勢いの陰り（1970 年代）

1962 年に、国が新産業都市建設法を制定したことに伴い、仙台湾周辺の 4 市 12 町村が仙台湾臨海地区に指定された。これを受けて名取市でも、工業団地の造成、工業用水道の敷設、高速自動車道・国道バイパスの建設、ニュータウンの建設などが計画される。市の総合都市計画の中で、市中心部の増田地区周辺は、増田工業団地をはじめとした工業地域に指定され、1960 年代以降、大手食品メーカー・大手機械メーカーなどの工場が立地した。また、工業用地の整備・企業誘致と並行して、市南西部の館越地区や愛島地区周辺には、「名取ニュータウン」が建設され、仙台市への通勤・通学者を中心に、新たに数千人の住民が居を構えることになった（辻 2019）。

閑上地区では、1972 年に名取川にかかる閑上大橋（現在の県道 10 号）が開通したことにより²²、仙台市方面へのアクセスが容易になり、陸区を中心に都市近郊型の農村へと変わっていった。稲作や畑作以外にも、カーネーションやバラなどの温室での花卉栽培やキュウリなどのビニールハウスでの生産が増加した。さらに、翌年の 1973 年、広浦で住宅地の確保のために埋め立て工事が行われ²³、現在の閑上 5 丁目にあたる場所に新たに住宅が建設された。閑上地区の航空写真（図 9～12）を見ても、年代を追うごとに広浦が埋め立てられ、住宅地が拡大していったことが分かる。

したがって、名取市内の市南西部でのニュータウンの建設や、閑上地区での広浦の埋め立てに伴う宅地開発により、いよいよ仙台市のベッドタウンとしての様相を強めていった。ベッドタウン化が進む一方で、名取市の中心部でも駅近くの商店街では年に 2、3 の空き店舗が生まれ、シャッター通り化していった²⁴。

²² 「東北の空の玄関「仙台空港」と海の玄関「仙台港」を結ぶ」橋として、閑上地区だけでなく、名取市周辺の交通を支える橋であった。（名取市、「広報なとり No.500」、1983 年 5 月 15 日）。

²³ 埋め立て前の広浦の様子について、「松原の先に湿地帯が広がり、カニなどが獲れる、ひろい場所だった」という。（R さんヒアリング 2020 年 10 月 6 日）

²⁴ 「名取市 地の利生かし独立独歩（わがまち・ふるさと）」、朝日新聞、2002 年 11 月 1 日朝刊



図 9



図 10



図 11



図 12

図 9 ～12：関上地区の年代別写真

(出典：国土地理院 撮影年：左上 1947 年、右上 1961 年、左下 1975 年、右下 1984 年 筆者加筆)

1970 年代の漁業については、名取川河口における赤貝・小玉貝などの採貝漁業が中心だった。(図 13) しかし、採貝漁業は資源保護の観点から漁獲期間が宮城県によって定められているなど、後継者の育成や設備投資による労働生産性の向上が漁業者の利益向上につながる構造にはなっていなかった。また、採貝漁業以外に底曳漁業も一定の漁獲高があったが、関上港を根拠地とする漁船は、ほとんどが仙台湾、金華山沖、福島県沖を操業区域として、船舶も宮城県の平均以下の小型であった。仙台湾の他の港に当時見られたような大型船による遠洋漁業は行われなかった。そして、関上大橋や仙台東部道路の開通までは、鉄道やトラック輸送の利便な場所ではないこともあり、宮城県の他の漁港に対する競争力も失われた。このことから、1970 年代以降、関上地区の漁業は次第に雇用吸引力を失っていった²⁵。

²⁵ ここまでの名取市関上地区の歴史については、1977 年発行の「名取市史」及び「関上風土



図 13：関上漁港での水揚げの様子

(出典：名取市図書館「名取デジタルアーカイブ」より 撮影：1971 年)

5) 地区環境の悪化と「漁師町」としての模索（1980 年代～震災前）

さらに 1980 年代以降、関上港での漁業は、周辺環境の変化や水質の悪化、仙台湾での乱獲と漁業規制などから漁獲高が減少し、高齢化などにより漁業従事者も減少していた²⁶。漁業をとりまく環境だけでなく、1970 年代の大規模な宅地化の影響か、貞山運河には、不法係留の小舟が壊れたまま放置され、水も茶色く濁ったりと、居住環境も悪化していた（岡崎編 1977：211）。

また、1972 年の関上大橋の開通で仙台市との自動車交通の往来が盛んになると、次第に仙台市郊外のロードサイド店に消費者が吸収されていき、鮮魚店や青果店、酒店など約 50 店舗が軒を連ねていた関上地区の町区の商店街では、売り上げの低迷も問題となった。かつてあったような漁師町としての賑わいは陰りを見せていた。

しかし、それでもかつての賑わいを取り戻そうという住民の動きも、このころから見られるようになった。その筆頭が、1985 年に関上漁港で始まった、ゆりあげ港朝市である²⁷。

記」を参照してきた。「名取市史」は、市の市史編纂委員会が執筆したものである。対して、「関上風土記」は、1918 年に編纂された「東多賀村郷土史」をもとに、地域の有志ら 5 名が、古老の話を聞いて歩き、古い写真や古文書を発見しながら編纂したものである（名取市、「広報なとり No.353」、1977 年 11 月 15 日）。

²⁶ 1980 年代以降の変化について、周辺環境の悪化の要因としては、1960 年代にできた岩沼市の製紙工場からの汚水による影響が大きいという。この汚水により、関上地区の漁師の中には、船の許可証を売り、保証金を受け取るなどして、漁業を引退する者もいた。（R さんヒアリング 2020 年 10 月 6 日）

²⁷ ゆりあげ港朝市としての創設は 1985 年であるが、その前身としては、1975 年に関上漁港の近海物を扱う水産加工業者有志 20 名が、五十集達の買い付けニーズにこたえるため、魚市場の前の 4 軒を中心に朝市を始めたことにある（辻 2019）。

水揚げが激減し、地域全体が低迷していた時期に、にぎわいを取り戻そうと商店主らが開始した。このゆりあげ港朝市では、近海で獲れた鮮度の良い魚介類などが並び、閑上地区の住民もさることながら、仙台市や県外などから多くの観光客が訪れ、「閑上にはよい魚が多いというイメージ」が定着したという²⁸。

また、閑上地区の民俗芸能を継承しようと、1988年に閑上大漁唄い込み大会が開始、1992年に閑上太鼓保存会が発足した。唄い込みと閑上太鼓はいずれも、ゆりあげ港朝市や夏祭りなどの閑上地区の行事・イベントなどで披露されてきた（図14～16）。



図 14：名取夏まつり大会 船と大漁旗

（出典：名取市図書館「名取デジタルアーカイブ」より 撮影：1986年 撮影者：平本剛生）

²⁸ Rさんヒアリング 2020年10月6日



図 15：名取夏まつり大会での関上大漁唄い込み

(出典：名取市図書館「名取デジタルアーカイブ」より 撮影：1986 年 撮影者：平本剛生)



図 16：なとり夏祭りでの関上太鼓の演奏

(出典：名取市図書館「名取デジタルアーカイブ」より 撮影：1997 年)



図 17：貞山運河

(出典：名取市図書館「名取デジタルアーカイブ」より 撮影：1996 年 撮影者：佐藤助治)

また、2000 年代には、貞山運河（図 17）や沿岸部の自然環境を見直すための活動が活発になる。

例えば、ゆりあげ港朝市協同組合が中心になって「貞山運河ブルーツーリズム実行委員会」を結成し、運河を小舟で巡るツアーの事業化を目指した。これに乗じて、運河周辺の環境に配慮しようという動きが活発になり、地元の住民たちで構成される「貞山運河愛護会」が、水質保全や景観のため、運河の縁に生えるヨシの枝切り作業を実施するなどした²⁹。

他には、2001 年に「名取ハマボウフウの会」が設立され、閑上地区の海岸のハマボウフウの保護育成を行ってきた。ハマボウフウとは、海岸の砂地に自生するセリ科の植物で、かつて閑上地区の海岸にも多く見られ、初夏、浜に出て新芽や若葉を摘む風景が風物詩となっていた。その後、一時は閑上地区の海岸からは絶滅したと考えられていたが、2000 年にハマボウフウが 3 株見つかったことを契機に、若苗の移植と保全活動が開始された³⁰。

こういった閑上地区の自然環境を見直すための活動は、地域活性化や観光名所化、地域の子どもたちの教育の場などの名目のもと、活発に行われるようになる。特に、名取ハマボウフウの会の活動は、近隣の小中高等学校の児童・生徒や閑上地区内外の住民が参加する形で、春秋年 2 回の移植が震災前まで実施されていた。

²⁹ 「環境との調和めざせ（4）宮城・名取など流れる貞山運河（観光を起こす）」日本経済新聞、2006 年 9 月 12 日

³⁰ 特定非営利活動法人名取ハマボウフウの会 パンフレット

2-3. 震災前の閑上地区での住民生活

閑上地区の震災前のコミュニティについては、全戸加入の町内会や、閑上小学校や閑上中学校の PTA などが住民生活を支える基盤となっていた。

震災直前までに 11 の町内会³¹が存在していた。各町内会の成立時期については、住宅地の造成や開発時期が異なっていたこともあり、一様には言えないが、古いものでは 1844 年の町村制以前の閑上浜の村・部落で成立したと考えられる。各町内会は、住民から徴収する会費を原資として、それぞれ独自に活動を行っていたほか、町内会同士で相互に連携し、町内会対抗の地区民運動会などを開催していた（辻 2019）。

また、閑上小学校や閑上中学校の PTA などを中心としたコミュニティの結束も強かった。震災前、閑上地区内には同一の学区域内に小学校と中学校の両方があり、9 年間を同じ顔ぶれで過ごす場合が多かった³²。また、小学校や中学校の PTA には、商工会員をはじめ、自営業者が多く、比較的、時間に融通が利く役員が半数近くを占めていたこともあり、PTA の活動が活発に行われた（辻 2019）。

また PTA だけでなく、学校を拠点とした子どもと地区住民の交流もあった。震災前から、閑上地区で教鞭をとってきた T さんは、閑上地区には「地域全体で子どもを育てる」意識が根付いていて、また、「先生の言うことは聞かないけど、地域のおじさん、お婆さんの言うことは聞く」子どもが多かったと話す³³。例えば、地区住民を中心として結成された「ゆりりん愛護会」³⁴と共に、授業の一環として、閑上地区の沿岸部の海岸林の整備（枝落としや松葉掻き）や、周辺の清掃活動などを行った。

また、町内会や PTA などを中心としたのコミュニティの他に、閑上漁港に拠点を置く産業団体、例えば、漁業協同組合や水産加工業組合、商工会なども閑上地区にみられた特徴的なコミュニティである（辻 2019）。

³¹ 町区に上町・中町・下町・新町・中島丁・日和山、陸区に小塚原北・小塚原南・牛野・大曲・高柳の 11 の町内会が存在した。

³² 震災前、名取市内の小学校及び中学校で、その両方が同一の学区域内にあるのは閑上地区のみだった。その他の地区では、小学校と中学校の学区域は重なっておらず、一つの中学校に対して、いくつかの小学校の生徒が通う、という構図になっていた。

³³ T さんヒアリング 2020 年 12 月 25 日

³⁴ 火災で焼失した閑上地区の沿岸部の海岸林を再生するべく、2004 年に開始した宮城県の事業である「環境学習林創造モデル事業」を発端として、2006 年に地区住民と学校の代表で構成される「ゆりりん愛護会」が発足した。海岸林は次第に整備されて行き、「ゆりりんの森」という愛称で親しまれ、地区住民の憩いの場になった（大橋 2014）。

第3章 東日本大震災と関上地区

3-1. 関上地区の災害史

本節では、関上地区に関する災害史についてみていく。(表1)

表1：関上地区における主な地震・津波・大雨など災害（昭和以降）

年	災害とその概要、関上地区の被害など
1933（昭和8）年	昭和三陸地震・津波 関上地区では人的被害はなかった。日和山に「地震があったら津波の用心」と書かれた石碑が建立。
1960（昭和35）年	チリ地震・津波 関上地区では、死者2名、行方不明3名の被害の他、関上漁港での物的被害が大きかった。
1978（昭和53）年	宮城県沖地震（M7.4、震度5） 関上地区では、家屋倒壊や地盤沈下、液状化現象などの被害
1986（昭和61）年	台風10号による大雨・洪水被害
1994（平成6）年	9.22 豪雨による大雨・洪水被害
2010（平成22）年	チリ地震・津波（震源 チリ中部沿岸、M8.8） 関上地区では潮位が50 cmほど上昇したが、大きな被害はなかった。
2011（平成23）年	東日本大震災

（出典：気象庁ホームページ³⁵及び岡崎編（1977）をもとに筆者作成）

関上地区は名取川を有しているため、古くから大雨や台風の時期には名取川の水が氾濫して洪水が発生した。関上地区ではこの洪水のことを「水増し」といい、毎年台風の時期になると、沿岸部の平坦な地域に名取川から氾濫した水があふれた。名取川の流路は、移動することも多く、特に、名取川の護岸整備が行われる以前は、現在よりも多くの洪水被害に見舞われたという。1986年8月の台風10号による豪雨災害は、200年に1度の大雨といわれ、関上地区でも広い範囲が浸水する被害を受けた。また、1994年の9.22豪雨では、関上地区において、人の膝丈くらいまで水が浸入し、広範で床上・床下の浸水被害を受けたことが伺える記録³⁶が残されている。

地震災害については、関上地区の住民からは、1978年の宮城県沖地震に関する語りがある。

³⁵ 気象庁、「過去の地震津波災害」、(<https://www.data.jma.go.jp/svd/eqev/data/higai/higai-1995.html> 2021年1月14日閲覧)

³⁶ 名取市図書館、「名取デジタルアーカイブ」の写真「9.22 豪雨（平成6年9月洪水） 関上7丁目」より

アリングの中で聞かれた。名取市は震度4から5を観測し、閑上地区では、サイクルスポーツセンターでのコンクリートのひび割れや、居住区での液状化現象などの被害が出た。翌年の1979年以降、毎年6月に、名取市で防災訓練が実施されたり、広報誌で防災についての情報が発信されるなど、地震や水害などの災害に対する防災意識を高めるための取り組みも行われてきた。

また、地震に伴う津波災害にも度々見舞われてきた。

1933年の昭和三陸地震による津波では、岩手県の沿岸部などを中心に3,064名の死者・行方不明者の被害があった。閑上地区では、津波の大きな被害はなかったものの、「地震があったら津波の用心」と記された高さ2.4mほどの石碑が建立された。

1960年のチリ地震津波では、日本では太平洋沿岸、特に東北のリアス海岸を中心に大きな津波の被害を受けた。閑上地区では名取川の河口付近で、出漁途中に引き波にあった船の乗組員が犠牲となった（死者2名、行方不明3名）ほか、漁港でのコンクリート壁の崩壊や漁船・漁具の沈没や流出などの被害を受けた（名取市1960）。

一方で、閑上地区の市街中心部には大きな浸水被害がなかったために、これ以降、「閑上に津波は来ない」という神話が、住民の間で語られるようになる。これについて、閑上風土記の「津波考」には、以下のような記述がある。

「貞山堀・広浦は緩衝地帯」

さて、昔から何回となく襲来した津波であるが、東北における津波地域は、三陸海岸の南部に当たる唐桑・気仙沼・志津川・雄勝・女川・牡鹿半島の直接太平洋に臨む海岸で、御前戸湾が交互に組み合い、そのすぐ背後には、北上山地が迫っているリアス式海岸である。湾の口が太平洋に向かって開いているので、津波の襲来をうけやすく、そこに密集して集落をもつ海岸地域は、しばしば大きな被害を受けてきた。

一方、閑上を含めた石巻・塩釜・七ヶ浜・荒浜などの仙台湾沿岸の地域は、牡鹿半島の西岸と、松島湾の沈降海岸を除けば、単調な弓上の砂丘海岸で、三陸海岸とは全く異なる。この海岸は遠浅で砂丘の発達が見られ、防潮林や防砂林を仕立てているところが多い。また砂丘の内側には、入江や貞山堀・北上運河などがあり、緩衝地帯となっている。したがって津波の襲来には三陸海岸ほどの不安はない。・・・(中略)・・・

閑上は地形的には恵まれ、津波による大きな被害はあまりなかったようであるが、海岸地域であることを忘れてはならない。広浦も大半埋め立てられ、明びな昔の面影は見るべくもなくなったが、昔から津波の緩衝的役目を、知らぬ間に果して来ていたのである。貞山堀にしてもそのとおりである。貞山堀を埋めて、海岸高速道路にしようなど計画を持たれたこともあったが、船の航行や排水のみが利用価値のすべてではないことを認識し、むしろその由緒からいっても、環境整備を施し、文化財として永久に保存すべきである。

(岡崎編 1977 : 340-341)

この「津波の襲来には三陸海岸ほどの不安はない」という記述の背景には、上述の通り、1960年のチリ地震による津波で、リアス沿岸部が壊滅的な被害を受けたことに対して、閑上地区では、防砂林や広浦によって津波の被害が比較的少なかったことがある。そのことから、このチリ地震を経験した世代を中心に、「閑上には津波は来ない」という認識が広まっていったと考えられる。

加えて、東日本大震災の前年の2010年に発生したチリ地震の際には、日本では、青森・岩手・宮城の3県の沿岸に大津波警報、その他の太平洋沿岸地域に津波警報などが発表された。閑上地区では貞山運河よりも海側の3丁目から6丁目の住民に避難指示が出され、公民館や小中学校に避難をした。気象庁の予測では最大3mの津波の到達予想が出され、実際、岩手県や宮城県のリアス沿岸部を中心に100cmを超える津波が観測されたものの、閑上地区では潮位が50cmほど上昇したのみで、津波の侵入などによる直接的な被害はなかった。

こういった「津波は来ない」という認識や、前年のチリ地震での経験もあったがゆえに、次節で述べる、東日本大震災の被災において、閑上地区で特に避難の判断に影響を及ぼした可能性がある³⁷。

³⁷ 東日本大震災発生後、避難行動をした閑上地区住民の声として、「昔のチリ津波で、閑上で人が死んだというのは聞いていたんですけど、その時もそんなに被害はなかったような言い方で・・・(中略)・・・だから、そんなにね、津波、津波ということは意識してなかったんです。津波が来るといっても「やっぱりほら来なかった」みたいな、そういうことが何度もあったので、津波に関してはあんまり警戒心はなかったですね。」「去年の二月二八日のチリ地震の津波の時も、大津波警報が出て、みんなで、本当に丸一日逃げてても何も来なかった。そういうのがあったんで「そんなの来ないよ」と言われそうで。」ということがある。(NHK スペシャル取材班 2013 : 30-31)

3－2．東日本大震災後の閉上地区

1) 震災当時の閉上地区の様子と被災状況

2011 年 3 月 11 日午後 2 時 46 分に発生した東北地方太平洋沖地震とそれによる津波で名取市は甚大な被害を受けた。名取市（2015）によると、同市では震度 6 強を観測した（揺れは約 3 分間継続した）。

本震の発生から 1 時間 6 分後の午後 3 時 52 分頃、閉上港に津波が到達し、沿岸部の閉上地区や下増田地区では、津波により多くの建物が流出・倒壊した。市域面積の約 28%にあたる約 27 km²が浸水し、閉上港漁港付近の建造物からの計測によれば、最大で約 9.09m の高さまで、津波が到達した（閉上港設置の潮位計は津波により破壊され、その後観測不能となる）。閉上地区では海から 1 km 以内の木造住宅はほぼ全て流出した。（図 2）また、津波による火災も発生し、名取市の沿岸部は壊滅的な被害を受けた。さらに、約 1 か月後の 4 月 7 日に発生した震度 6 弱の大きな余震により、一層被害が拡大した（名取市 2015：22-23）。

表 2：名取市の被災状況

地震の状況	震度 6 強を観測 特に沿岸部で地盤沈下や液状化現象の被害
津波の状況	最大浸水高：9.09m（参考値） 最大浸水距離：地上 約 5.5km 河川 約 8km（名取川） 浸水面積 約 27 km ² （市域面積の約 28%）
人的被害	死者 964 人（平成 26 年 3 月 31 日現在、関連死含む） 負傷者 208 人（重傷者 14 人、軽症者 194 人） 11,000 人を超える人々が避難生活を余儀なくされる ※震災前の人口 73,193 人（2011 年 1 月末時点）
住家被害	全壊 2,801 件 大規模半壊 219 件 半壊 910 件

（出典：名取市（2015）より筆者作成）



図 18：関上地区航空写真（出典：宮城県ホームページ³⁸ 撮影：2001 年 9 月 撮影者：（社）東北建設協会）



図 19：関上地区航空写真（出典：宮城県ホームページ³⁹ 撮影：2011 年 3 月 27 日 撮影者：（社）東北建設協会）

³⁸ 宮城県、「『東日本大震災』関連公共土木施設被災・応急復旧状況（宮城県土木部河川関連分）」、(<https://www.pref.miyagi.jp/soshiki/dobokusom/ds-hikaku-index.html>、2020 年 12 月 27 日閲覧)

³⁹ 同上

沿岸部の閑上地区は平均 2～3 m 程度の標高しかなく、日和山（標高 6.3 m）以外は小高い丘もない地形であり、その日和山でさえも、丘の頂上から 2.1 m 上まで浸水した記録が残っていた。沿岸部には、3 階建て以上の津波に耐えられる鉄筋コンクリート造の建造物は小・中学校の校舎など限られた数しかなく、特に、貞山運河以東の閑上 3～6 丁目では、ほとんどの家屋が流出した（図 20）。こうした、沿岸部の地形や環境と巨大な津波により、大きな被害が生じたと考えられる。津波は、広浦など東方より閑上地区に流入し、沿岸部から 5 km ほどの距離に位置する仙台東部道路でせき止められるまで進入した（名取市 2015：23-24）。

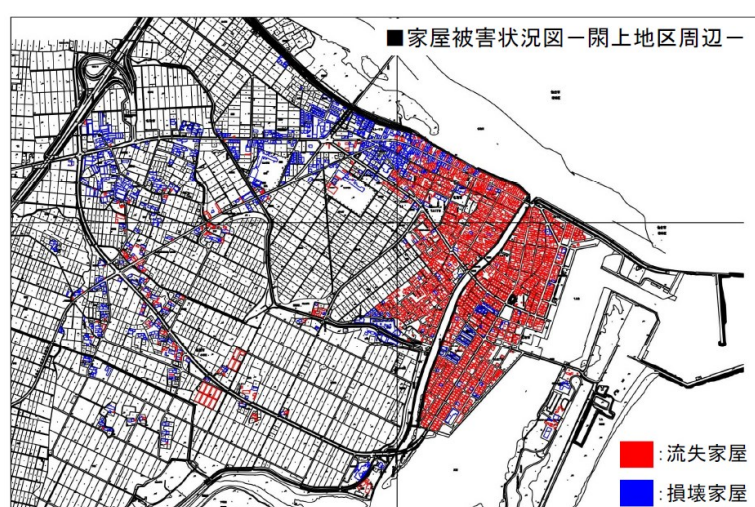


図 20：閑上地区における家屋被害状況（出典：第 1 回名取市新たな未来会議資料）

表 3：被害甚大地区における死者の割合（平成 26 年 3 月 31 日現在）

地区名	地区人口（人）	死者数（人）	人口に占める死者の割合（％）
閑上町区	5,686	709	12.5
閑上小塚原地区	461	43	9.3
下増田北釜地区	396	47	11.9
名取市全体	73,229	884	1.2

（出典：名取市（2015：31）をもとに筆者作成、人口は 2011 年 2 月末現在）

同じ閑上地区内でも、沿岸部の町区と内陸部の陸区とでは、主に津波による被害の状況には大きな違いがあった。表 3 の通り、町区ではほとんどの家屋が流出し、709 人が亡くなった。陸区では、家屋が損壊・倒壊被害を受け、44 人が亡くなった。

内陸に侵入した多くの海水はその場にとどまり、徐々に浸透・排水されたため、多くのがれきが流されずに水田内にそのまま残された。また、農地が海水に浸ったことで、塩害により農作物が育てられなくなるなど、農業にも多くの被害をもたらした。

陸区の小塚原地区などの水田の一部は、発災後2か月が経過しても水が引かなかったことが報告されており（名取市 2015：24）、内陸部であっても、津波の被害を長期にわたって受けたことが伺える。

津波被害を受け名取市では、3月11日より順次、市内各地に避難所を設置した。市内に設置された避難所は52か所、避難者総数は11,233人にのぼった。この避難所の設置・運営と並行して、プレハブの仮設住宅の建設も進められ、市内8か所に計910戸が建設された（図21）。

この仮設住宅の入居に際しては、おおむね旧来の町内会を維持して入居先が決められたが、ばらばらの立地環境とせざるをえず、仮設住宅の住民間の交流を促すような環境には恵まれていなかった（内田 2019）。

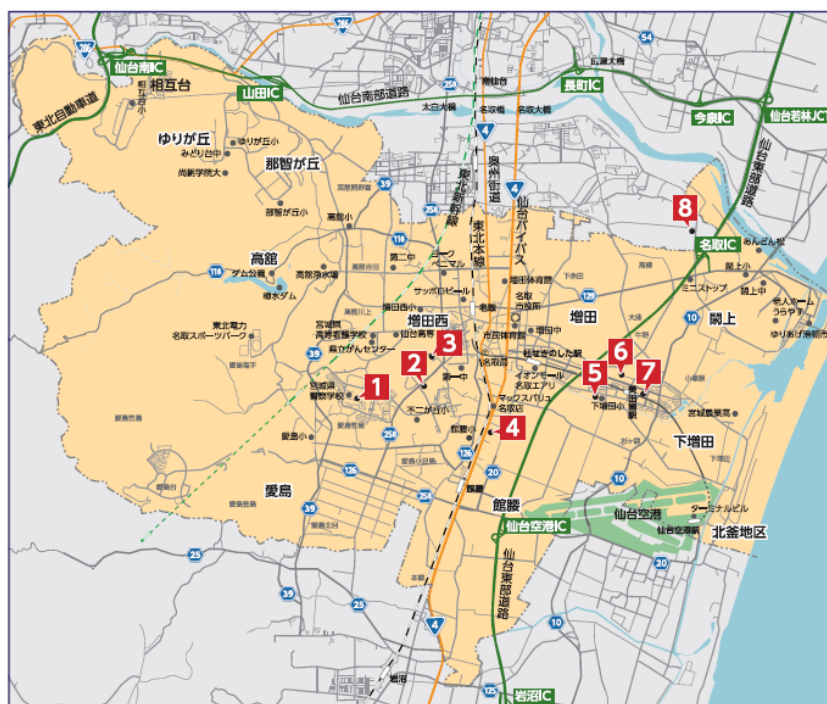


図 21：名取市におけるプレハブ仮設住宅位置図（出典：名取市 2015：9）⁴⁰

⁴⁰ 図の番号と各仮設住宅の名称は、次のように対応している。1：愛島東部、2：箱塚桜、3：箱塚屋敷、4：植松入生、5：美田園第三、6：美田園第一、7：美田園第二、8：グループホームゆりあげ

2) 復旧期から震災復興計画策定過程 —「現地再建」に関するコンフリクト

閑上地区の復興計画策定過程についての研究は、内田（2019）、酒井・村尾（2019）、辻（2019）などに詳しい。名取市の資料なども交えつつ、復興計画策定過程をまとめていく。

2011 年 10 月に名取市は、市民生活の早期再建や地域の社会的機能や社会経済活動の復旧など復興に取り組んでいくための指針として「名取市震災復興計画」（計画期間：2011～2017 年）を策定した。その中で、閑上地区に関しては「現在の位置での被災市街地復興土地区画整理事業による再建を基本」とするとした「現地再建」の方針を示した。

この震災復興計画の策定にあたり、市民の意向を反映させた復興計画提言を行うために、「名取市新たな未来会議」が設置された。この会議は、学識経験者、各種団体の代表、市長より委託された市民代表などで構成され、2011 年 5 月に第 1 回の会合を開催して以降、計 8 回の会合が行われた。会議での主な論点は、閑上地区や下増田地区などの沿岸部地区について、集団移転をするか、現地再建をするか、という点であった。2011 年 8 月開催の第 6 回会合において、住民委員 8 名により行われた投票で、現地再建案が 5 票を獲得して採択され⁴¹、復興計画提言書として市長に提出し、それをもとに、9 月に地域懇談会や「震災復興に関する意向調査」が行われ、震災復興計画が策定された。

名取市が 2011 年秋に実施した市民意向調査（名取市 2011）では、震災前に閑上地区に居住していた人のうち、復興後、閑上地区に住みたいと答えた人は 25.6%（327 件／1,277 件）であった⁴²。その後、名取市震災復興計画をうけて、2012 年 2～5 月に実施された、閑上復興まちづくり意向調査では、閑上地区内の再建を望んだのは 39.7%（520 件／1,309 件）と、一度は増加したものの、2012 年 7 月及び 2012 年 4～5 月に実施された市による個別面談では、それぞれ、34.1%（550 件／1,613 件）、25%（542 件／2,167 件）と、現地再建希望者は減少していく⁴³。つまり、市の発表した現地再建の方針に対して、閑上地区に居住していた人々は必ずしも、現地再建に前向きではなかったことが伺える。

2013 年 2 月に市が開いた閑上復興まちづくり推進協議会では、現地の区画整理と集団移転を併用する折衷案を示したが、住民の間では現地再建派と内陸移転派とで意見が割れた。閑上地区に戻らず、内陸移転を望む住民が当初の予想よりも増えたため、計画人口及び事業

⁴¹ 「第 6 回名取市新たな未来会議 議事要旨」より（名取市ホームページ「第 6 回名取市新たな未来会議が開催されました」、https://www.city.natori.miyagi.jp/shinsai/fukkoukeikaku/node_31410/node_33438、2021 年 1 月 6 日閲覧）

⁴² 復興後、居住したい場所について、回答の詳細としては、「閑上地区」25.6%、「高柳地区、大曲地区、小塚原地区、牛野地区」15.6%、「その他名取市内」27.0%、「名取市外」3.8%、「まだ決められない」23.8%、「その他」4.2% であった。

⁴³ 名取市、2020、「震災復興の取り組みについて 〈第 2 回テーマ：被災者意向等と事業計画〉」、(<https://www.mlit.go.jp/toshi/content/001363508.pdf>、2020 年 12 月 29 日閲覧)

規模は度重なって縮小した⁴⁴。

このように、住民の間では現地再建と内陸移転とで意見が割れ、合意形成に時間を要した。これについて、内田は、同じく名取市内の下増田地区や、隣接する岩沼市と比較したうえで、①被災前の閑上地区が人口集中地区であったこと、②被災規模が大きいかつ、ステークホルダーが多いため合意形成のプロセスが複雑であったこと、③被災後の仮設住宅でコミュニティが維持されにくかったこと、の3点を理由として挙げている。①については、従前の人口規模での防災集団移転促進事業の実施の困難さだけでなく、人口が多いがゆえに、個々人の生活様式や閑上地区への愛着などが異なり、それがひいては、現地再建／内陸移転の選択にも影響を与えたと指摘している。すなわち、閑上港で育まれた独自の文化の継承などを理由に、港から離れず現地再建を希望する層と、職場が仙台市などにあり、閑上地区はあくまでベッドタウンに過ぎないと考え、内陸部への移転を希望する層がいたということである（内田 2019）。

最終的に、復興事業については、被災市街地復興土地区画整理事業と、防災集団移転促進事業の併用で推進されることとなる。2013年9月に、貞山運河より東部の約65haが災害危険区域とされ、防災集団移転促進事業として国土交通大臣の同意を得た。さらに、同年11月に、宮城県より復興土地区画整理事業と防災集団移転促進事業の併用による促進事業が宮城県より認可され、約57ha（うち約32haを海拔5mの高さになるよう平均3mかさ上げ）の土地区画整理事業の事業計画が決定された（内田 2019）。

⁴⁴ 計画人口は当初の5,500人から、最終的に約2,100人に見直し、居住区域面積は当初の122haから57haに見直し、かさ上げ面積は当初の70haから32haに見直しされた。

表 4：名取市及び閑上地区における復興過程における主な出来事

年	月日	主な出来事
2011	5月～	仮設住宅への入居開始
	5月	「名取市新たな未来会議」（第1回）の開催
	9月	名取市震災復興に関する市民意向調査の実施
	10月	「名取市震災復興計画」の策定
	11月	「閑上復興100人会議」（第1回）の開催
	12月	閑上復興まちづくり推進協議会の設立（～2013年9月）
2012	2月	閑上さいかい市場の開設（閑上地区の商店などの仮設店舗で美田園地区に設置、～2019年12月閉鎖）
	2～5月	閑上復興まちづくり意向調査の実施
	5月	閑上仮設市場の開設
2013	3月	「名取市沿岸地域活性化振興ビジョン」の策定
	5月	「名取市災害公営住宅整備計画」の策定
	5月	ゆりあげ港朝市が閑上地区にて営業を再開（同年12月グランドオープン）
	11月	閑上地区被災市街地復興土地区画整理事業 事業計画決定（事業施工期間～2021年3月31日）
2014	3月	海岸堤防完成
	5月	閑上地区まちづくり協議会の設立（～現在）
	10月	閑上地区被災市街地復興土地区画整理事業 起工式
2016	7月	名取市長選 現職の佐々木十一郎氏が敗れ、山田司郎氏に
2017	3月	「名取市震災復興計画（改訂版）」の策定
	6月	閑上東地区区画整理事業起工式
	7月	閑上地区集合復興公営住宅完成
2018	1月	「閑上地区まちなか再生計画」の策定
	4月	名取市立閑上小中学校の開校
2019	4月	かわまちてらす閑上のオープン みちのく潮風トレイル名取トレイルセンターのオープン
	5月	閑上地区まちびらきの開催 新閑上公民館の開館、震災メモリアル公園開園
2020	3月	名取市復興達成宣言
	4月	応急仮設住宅（プレハブ）の入居者がすべて退去
	5月	名取市震災復興伝承館 開館
	10月	新名取市サイクルスポーツセンター 開館

（出典：名取市ホームページ、酒井・村尾（2019）などより筆者作成）

3) 復興事業の開始から「復興達成」へ

2014年10月に、災害公営住宅の建設や防災集団移転団地の造成に向けた区画整理事業を開始した。この区画整理事業の開始に至るまで、閉上地区の復興の方針策定に関する合意形成に時間を有したこともあり、名取市や閉上地区の復興は遅い、ということもいわれた。

実際、宮城県が「住宅地」「災害（復興）公営住宅」「農業・公益施設用地」の3分野で、発災後3年強が経過した2014年6月時点での復興状況の進行率を数値化したところ、名取市は最も進捗が遅く、18%であり、2番目に遅い塩釜市の27%を10ポイント近く下回っていた。また、住環境復興の目安となる災害（復興）公営住宅の整備状況を見ても、2015年3月段階において、名取市では計画戸数716戸のうち、整備完了戸数は42戸でわずか5.9%にとどまっていた（内田2019）。

震災復興計画に基づいて、事業地ではかさ上げ工事や堤防・河川護岸整備などが進められ、震災前に建っていた建物は、被害の程度に関わらず全て取り壊され、区画整備が行われた。

閉上地区の多くの建物が倒壊・流出した中で、やや内陸部に位置していた頑丈な構造の建物（例えば、消防署、水産加工工場、精麦工場）は残っているものもあった。しかし、復興計画を進める上で、それらの建物は主にかさ上げ工事のために移転、取り壊しを余儀なくされた。また、名取市は閉上地区において震災遺構を残さない方針を定めたため、そのような遺構は2017年までにすべて撤去された。

その後、閉上地区ではかさ上げ及び区画整理の完了した区画に新たに建物が建てられていく。災害公営住宅にはじまり、2019年には、閉上公民館、かわまちてらす閉上、みちのく潮風トレイル名取トレイルセンター、震災メモリアル公園⁴⁵など、公共施設だけでなく、商業・観光施設なども完成・開館した。

こういった施設の完成を記念し、行政の復興計画・事業の一つの区切りとして、2019年5月には「閉上まちびらき」というイベントが開催された⁴⁶。

名取市震災復興計画での計画期間は2019年度までであった。2020年度には、震災の教訓を後世に伝える震災復興伝承館⁴⁷と歴史民俗資料館、児童センター、イトーチェーン（ス

⁴⁵ 震災メモリアル公園は、東日本大震災の記憶及び教訓などを伝承するための市の施設として、2019年5月に日和山を拠点とした約3.35haの公園として、閉上5丁目に開園した。慰霊碑や「地震があったら津波の用心」と書かれた石碑が置かれ、震災への祈りの場及び震災の伝承の場であるとしている。記念式典などでの利用も想定している（震災伝承ネットワーク協議会事務局ホームページ、<http://www.thr.mlit.go.jp/sinsaidensyou/sisetsu/facility/miyagi-3-014.html>、2021年1月5日閲覧）。

⁴⁶ このイベントには地区内外から約2万人が訪れた。また、「閉上」の地名の由来ともなった御神体をまつる市内の熊野那智神社のみこしが、山から浜へ里帰りする「お浜降り」が21年ぶりに行われたほか、震災前まで毎年夏に行われていた大漁船のパレードも復活した。（「閉上、未来へ再出発 「まちびらき」に2万人」、朝日新聞、2019年5月28日朝刊）

⁴⁷ 東日本大震災の記憶及び教訓などを伝承するための施設として、2020年4月に閉上地区（閉上2丁目、国土交通省の河川防災ステーションの敷地内）に開館した。一般社団法人名取

ーパー)、サイクルスポーツセンターなどが整備された。

2020 年 3 月、名取市は大きな被害を受けた沿岸部で災害公営住宅の建設や、公共施設の復旧などインフラ整備がおおむね完了したとして、復興達成を宣言した（名取市 2020）。被災者の心のケアやコミュニティ形成、防災・減災施策などの課題に今後も取り組む、としている。

4）復興過程における閉上地区での住民生活

名取市の地区別人口の統計によると、閉上地区の人口は以下の表のように変化している（表 5）。震災後、2016 年までは世帯数、人口共に減少していたが、災害公営住宅をはじめとして住宅の整備が進んだ 2017 年以降、世帯数、人口共に増加しており、2019 年 5 月分の統計では、世帯数 1,334、人口は 2,974 人（うち 15 歳未満が 355 人（11.9%）、15～64 歳が 1,561 人（52.5%）、65 歳以上が 1,058 人（35.6%））となった。

表 5：閉上地区の世帯数及び人口推移（2011 年～2020 年：各年 1 月末現在）

年	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020
世帯数	2,549	1,380	1,217	1,017	920	839	869	1,047	1,182	1,316
人口	7,101	3,488	2,984	2,511	2,244	2,052	2,108	2,371	2,591	2,912

（出典：名取市ホームページ「月毎地区別人口」より筆者作成）

閉上地区の 15 歳未満の人口は、2017 年 5 月の 182 人（全体の 8.5 %）から、2020 年 5 月の 355 人へと増加しており、この世代を子どもにもつ家族世帯の流入が進んでいるとみられる。その要因としては、名取市が 2019 年 5 月に施行した閉上地区定住促進事業住宅取得補助金の制度のもとで、仙台市などから家族世帯を中心に流入が進んだこと、また、閉上地区の復興計画の核でもある、閉上小中義務教育学校が開校（2018 年 5 月）し、子どもが教育を受ける環境が整備されたことなどが考えられる。

市観光物産協会が指定管理の委託を受け、運営している。（館内の様子などについては、2020 年 11 月 15 日に訪問した際のフィールドノートや取得資料に基づいて記述している。）館内に入ると一番に目を引くのが、震災前の閉上地区の復元模型である。神戸大学や仙台高等専門学校などで建築を学ぶ学生が、「地域に育まれてきた街並みや人々の記憶を保存・継承していく」ことを目的として制作した、震災前の閉上地区のまちなみを再現した 1/500 スケールの模型が展示されている。沿岸部の松林や、広浦に浮かぶ船、また模型の建物には、商店名や「〇〇さん宅」という名札がつけられ、閉上地区の生活環境がどのような様子であったのか、表現しようとしている。他に、閉上地区の津波被害や復興過程についての記録や写真、町内会長・各種団体の代表などへの「復興へのあゆみ」についてのインタビューなどをパネル展示している。

第4章 関上地区でのローカル・アイデンティティ構築の営みの変容

4-1. ローカル・アイデンティティ構築の営みへの着目

第3章で、関上地区にひろがっていた生活の歴史を見てきたが、それらから推測するに、関上地区のローカル・アイデンティティそれ自体は、震災前から、江戸時代から続く漁師町、工業・水産加工団地の立地、ニュータウン化、漁業環境の変化の中での漁師町としての模索というような形で、不断に再構築され続けてきたといえる。

大堀が、ローカル・アイデンティティは、地域の本質に対して同一化する側面だけを有するのではなく、(アイデンティティと同様に)「ローカル・アイデンティティも、形成されるもの、変化し続けるもの」としての側面を有することを指摘する(大堀 2010:156)ように、ローカル・アイデンティティが変わっていくことは当然ともいえる。それはつまり、震災や津波、その後の復興事業から現在に至る震災後の時間においても、震災前の時間と同じく、ローカル・アイデンティティは再構築されていくものだといえ、ローカル・アイデンティティが変化することは、必ずしも問題だとして捉えることはできない。

しかし、ここで考えたいのは、ローカル・アイデンティティそれ自体が何であり、どう変化したのかということ以上に、ローカル・アイデンティティを構築していく営みについて、震災前とは大きく異なる状態が出現しているのでは、ということである。この仮定を念頭に置きつつ、震災を契機として、津波被災地のローカル・アイデンティティとその構築に、なぜ着目する必要があるのかということを論じていきたい。

4-2. 震災前のローカル・アイデンティティ構築の営み

まず、関上地区における震災前のローカル・アイデンティティ構築の営みとしては、第2章で見たように、関上地区に根付いていた地域コミュニティの存在を指摘できる。

例えば、町内会を起点としたコミュニティでは、地区民運動会やお祭り、盆火などの季節ごとの行事が行われていた。関上小学校や関上中学校のPTAなどを中心としたコミュニティの結束も強く、PTAの活動や、地区住民団体との活動などが活発に行われていた。また漁師町としての歴史を背景として、関上漁港関係者のネットワークも存在していた。

ある地区住民は、震災前の関上地区のコミュニティについて、「昔は、田舎だったのもあるけど、横のつながりがあったんですよ。・・・町内会だとかで。」⁴⁸と、行事ごとに限らず、日常的に住民同士の横のつながりが密接であったと話す。

また、世代を超えた交流も盛んであった。この背景のひとつには、関上地区に学区域を同一にする関上小学校と関上中学校があり、持ち上がりで9年間を同じメンバーで過ごし、先輩・後輩の関係も強かったことがある。それに付随して、関上地区の子ども達には「(先

⁴⁸ Fさんヒアリング 2020年7月15日

生の言うことは聞かないけど、) 地域のおじさん、お婆さんのいうことはよくきく」⁴⁹という態度も見られた。そういったつながりの中で、例えば、閑上地区の歴史なども口承により伝え聞かれていく場面があった⁵⁰。

ただ、必ずしも住民同士のふれあいの場が多かったわけではない。地区民運動会や夏祭りのように町内会単位で開催される行事などもあったが、いも煮会や餅つきなどは仲間内、いわゆる内輪（例えば、子ども会やスポーツ会の集まりなどで）で行われることが多かったという⁵¹。

つまり、震災前には当たり前に関上地区に存在していた場や環境、人とのつながり、そういったものの総体が、ローカル・アイデンティティ構築の営みとしての様相を成していたといえる。ただ、それらは当たり前が存在していたがゆえに、震災前は気づかれる場面が少なかった。次節にみていくように、震災を契機に、地区住民にとって数々の「喪失」の経験があったことで、かつてあったが、今は取り戻すのが難しい営みとして強く認識されるようになったといえる。

4-3. 震災後の喪失としての語り

それでは、震災を契機に、閑上地区に存在していたこのようなローカル・アイデンティティ構築の営みはどのように変容したのか。ここでは、ヒアリング調査の語りを引用しながら、それを見ていきたい。

震災前から閑上地区で生活してきた住民が、震災後の閑上地区について語る時、そこには喪失の表現が数多く聞かれる。

Rさんは、幼少期から学生時代を閑上地区で過ごした思い出を振り返りつつ、自分にとって閑上地区がどのような場所であったのか次のように語る。

「(閑上が好きという気持ちは) 年を取るほどに強くなるのね。震災のあと、わっと閑上に対する思いが強かった。普段は意識してないのね。なくなったとたんに、わっと。ふるさとというか、私の人格形成はここで、って強く強く感じますよね。だから、自然とか風景とか、環境っていうのは人間に与える影響がものすごいんじゃないかな。」

「昔にかえるのは絶対無理。閑上だって、あのまちの雰囲気は、もう戻らないし。大体、人々が、あの当時の元気な人がいないし。」

(Rさんヒアリング 2020年10月6日)

⁴⁹ Tさんヒアリング 2020年12月25日

⁵⁰ 閑上地区の歴史資料などは、水害や大火などによって度々失われてきたため、かつては、口承で伝わる部分が多かった (Eさんヒアリング 2020年12月19日)

⁵¹ Eさんヒアリング 2020年12月19日

ここで、「なくなった」と表現について考えたい。震災前の平時の生活では、「閑上に対する思い」というのは、考える機会が少ないがゆえに意識されにくい。しかし、震災と津波により、当然のようにあったものが「なくなったとたんに」、「わっと」こみ上げるようにそうした思いが生じてきた、という語りだと考えられる。ここで R さんが「なくなった」と感じているのは、「自然とか風景とか、環境」といった閑上地区にひろがっていた生活の景色であり、人格、いわば自己を形成してきた「ふるさと」であったといえる。

他の語りからも、震災後の閑上地区について、「何も残っていない」、「壊れてしまった」⁵²、「(かつての) あしあとが、新しいまちには残っていない」⁵³というような語りが聞かれる。例えば、以下の A さんの語りである。

「(今の閑上は) 何も残っていないまち」

「まちだけをつくっちゃったっていう感じが無きにしも非ず。こうだよっていう理想をかかげないとまちづくりはできないけれど、まちじゃなく一種の集団ができた。・・・ここは現地再建。昔のまちや生活を戻したいということで、トップの人は現地再建にこだわった。とっかかりが遅くなったのも確か。・・・時間の経過の中で、待てられない人もいた。日々の生活があるから。」

(A さんヒアリング 2019 年 12 月 13 日)

「何も残っていない」という語りには、まず、個々の生活が営まれていた家々や建物が失われたという意味をくみ取ることができる。というのも、上述の語りの後で A さんは「モノとして残されたものがない中で、震災前の記憶をどう伝えるか」という語りをしているためである。A さんは、震災以降、閑上地区で語り部の活動を行っており、その活動を行う中でこの喪失がより際立ったと考える。

また、上述（前頁）の R さんの「あのまちの雰囲気は、もう戻らないし。大体、人々が、あの当時の元気な人がいないし。」と、A さんの「一種の集団ができた」、「時間の経過の中で、待てられない人もいた。」という語りは、震災後に、閑上地区のコミュニティの様相が大きく変化し、現地再建に対するそれぞれの考えや、避難所から仮設住宅などへの移転の中で、コミュニティが徐々に解体していったことを物語っている。閑上地区に戻り生活する人は決して多くなく、現在の閑上地区には、かつての濃い「横のつながり」が見いだされにくい。そういったコミュニティの喪失を、これらの語りの中に見出すことができるといえるだろう。

また、2014 年の閑上地区被災市街地復興土地区画整理事業が開始されて以降、現在に至るまで、閑上地区ではかさ上げ工事や区画整備をした上で、新たな住宅や公共施設などが建

⁵² F さんヒアリング 2020 年 7 月 15 日

⁵³ O さんヒアリング 2020 年 12 月 19 日

設されてきた。震災復興計画では、閑上地区の事業方針について、「災害に対する安心感があるまち」、「閑上の魅力を生かすまち」、「未来の住民も「住み続けたい」まち」ということが掲げられた⁵⁴が、それに対する閑上地区の語りからは複雑な思いが読み取れる。

「今の閑上を閑上と言っていいか、ってどう思いますか。」

「全く違うまちが同じ場所につくられているんです。」

「外から見た分には、あれは閑上っていう風には言えない。都会の新興団地ですよ。

スーパーがあって、コンビニがあって、道路も違いますもんね。」

「まちの様子が変わってしまって、(かつての閑上と今の閑上が) 細い糸でつながっている、それを手繰り寄せていくようなこと。」

(G さんヒアリング 2020 年 7 月 16 日)

「(現在の閑上地区について) すっかり様変わりで、何の懐かしさも感じないわね。もう、閑上だっという印象がない。新しい閑上だから、新しい人が住んで。私の閑上ではないわね、もうね。だから、行ってみるのもあまりいい気持ちはしない。残っているのは日和山くらいかな。あとは、まちなかは、もうなんか、全然違うもん。どこに何あったかもわからないし。」

(R さんヒアリング 2020 年 10 月 6 日)

G さんは、土地区画整理事業などが進行する中で、スーパーやコンビニのある都会の新興団地のような「全く違うまち」としての「閑上」が、同じ場所につくられているという。「今の閑上を閑上と言っていいか」という語りには、「全く違うまち」の出現によって、かつての閑上地区の姿は覆い隠されるように喪失してしまった、という意図をくみ取ることができる。

また、R さんの語りからは、そうした「すっかり様変わり」した閑上地区の姿は、もはや、自らにとっての「私の閑上」ではなく、新たにそこで生活する人々にとっての「新しい閑上」だと認識していることが読み取れる。R さんが閑上地区を「自己形成の場」と表現していたことから、新しい閑上地区の様相ができていくにつれて、自分のものではない閑上地区に変わっていつてしまう喪失を感じていたことが伺える。

ここまで、喪失としての語りを見てきた。閑上地区の住民にとっての喪失とは、閑上地区にひろがっていた生活の景色、町内会や公民館などを拠点としたコミュニティなどであり、それが一時的ではなく、震災と津波の被害をうけた更地の状態に始まり、土地区画整理事業

⁵⁴ 「閑上の魅力を生かすまち」については、「海との共生（水産業、景色、潮風、観光交流、レジャー…）」、「歴史の継承（貞山運河、漁港、寺社、祭り、日和山…）」、「歩いて暮らせる（コミュニティ、学校、商店街、病院、職場、避難…）」と示されている（名取市 2017：19）。

の進行など、刻々と閑上地区の様子が変化していく中で、何重にも喪失を感じさせる瞬間があったと考えられる⁵⁵。そういった喪失の経験ゆえに、それらは閑上地区の住民にとって、「もう戻らない」閑上地区として認識されていったように考えられる。

ただ、Gさんの「(かつての閑上と今の閑上が) 細い糸でつながっている、それを手繰り寄せていくようなこと。」という語りには、あらゆるものを喪失したのではなく、細い糸ではあるが、過去と現在の閑上地区をつなぐ何かがある、ことを示していると考えられる。次節では、この「つなぐ」という表現に着目して、閑上地区で「つなぐ」営みとして、どのようなローカル・アイデンティティ構築の場が現れていったのかを見ていきたい。

4-4. 震災後のローカル・アイデンティティ構築の営みの現れ —「つなぐ」営みとして

前節では、喪失を象徴するような語りをみてきた。そこから、震災のその後の復興計画事業の進展の中で、何重もの喪失を経験したと考えられた。しかし、あらゆるものを喪失したわけではない。その経験を越え、閑上地区で再び生活していく中で、「つなぐ」営みを展開していく閑上地区の姿が、喪失と同時に存在している。

そこで、本節では、「つなぐ」営みとして現れてきたローカル・アイデンティティ構築の営みについて、震災前後の閑上地区をいかようにつなごうとしているのか、という点に着目し、ヒアリング調査における語りも引用しながら見ていく。

1) 「継続」させていく営み

「つなぐ」という言葉には、「切れまたは離れているものを続け合わせる」、「長く続くようにする」「絶えぬようにする」という意味があるように⁵⁶、「つなぐ」営みと表現した際に、そこには、離れたものを再び続けようという意志を持って、継続させていく、継承していくといった意味が内包されるといえる。

まず、「つなぐ」営みの一つとして、震災前からの営みを「継続」させていく形で、震災後に現れたローカル・アイデンティティ構築の営みを見ていきたい。ただ、震災による中断があること、その内実の若干の変化があることなど、震災前の営みをそのまま継続しているとは限らないという点は断っておく。

「継続」させていく営みの一つとして、ゆりあげ港朝市が挙げられる。第2章で見た通り、1985年にゆりあげ港朝市協同組合によって始まったゆりあげ港朝市には、鮮魚店や青果店、飲食店など約50店舗が軒を連ね、日曜日や祝日には、朝早くから閑上地区内外から観光客

⁵⁵ 「今の閑上はどんどん変わり、遠くなってしまった」(Rさんヒアリング 2020年12月6日)という語りに、一時的でなく、震災後の時間経過の中で、段々と閑上地区が「遠く」になっていったということが伺える。

⁵⁶ 岩波書店、1979、『広辞苑(第2版増訂版)』

が集まった。震災により、ゆりあげ港朝市が開催されていた閑上漁港が被害を受けたが、震災から 3 週間後には、市内にある大型商業施設駐車場の一部を無償で借り受け、営業を再開した。2012 年に、カナダのブリティッシュコロンビア州などより名取市に復興支援金が受託され、震災前と同じ場所での現地再建が決定した（日誌 2017）。その後、2013 年 5 月に現在の場所に移転して以降、店舗での販売に加えて、来場者参加型の競り市の開催や、セリ鍋やサンマなど季節の料理の無料配布、炉端焼きスペースの設置など、観光客を呼び込むような取組みが行われてきた⁵⁷。

ゆりあげ港朝市は、震災後の閑上地区の市街地がまだ整備されていない状況の中で、組合の自助努力によって再開され、地区住民だけでなく、観光客も含めて朝市を通して閑上地区に足を運びきっかけをつくり、閑上地区の復興を推進する重要な場となった（日誌 2017）。

このように、ゆりあげ港朝市は、閑上地区の「漁師町」としての歴史や生業をつなぐ営みとして、震災前と同じ場所でその営みが継続されてきたといえる⁵⁸。

しかし、その一方で、必ずしもかつての営みをそのまま再開すればよいということではない。その例として、E さんは 2011 年の 8 月に閑上地区で行った盆火の様子を挙げる。閑上地区ではお盆の時期に、迎え火と送り火として盆火を焚いた。そして、子ども達を中心に、柳の枝に年の数だけまんじゅうを刺して、盆火であぶって焼くのが習わしであった。それにならって、E さんも閑上地区の住民を集め、端材を集めて焚火をたき、枝にまんじゅうをつけて燃したが、「何かが違う」と感じたという。他の参加者もそう感じたのか、翌年以降は参加者も減っていった。震災前の盆火の際に、まんじゅうを作っていた閑上地区の和菓子屋は廃業してしまい、仙台市の他の和菓子屋に頼んだが、まんじゅうの味や盆火全体の雰囲気など、震災前との違いをむしろ強く意識してしまったという⁵⁹。

閑上地区において震災前から「継続」させていく営みは随所にみられたが、この盆火の語りに象徴されるように「何かが違う」という違和感、もしくはしっくりとしたなじまなさを感じる場面があったことも分かる。

2) 住民による「紡ぎ直し」の営み

これまで、震災後の閑上地区における喪失や、「なんか違う」といった違和感の語りを見てきた。次に、「つなぐ」営みのうち、住民の語る行為に重きを置く「紡ぎ直し」の営みに着目する。ここで着目する「紡ぎ直し」では、自己と地域の物語を自分になじむよう語り直していく様子が伺える。

⁵⁷ ゆりあげ港朝市に隣接する区画には、メイプル館（カナダ政府などの支援により建設された）と呼ばれる建物が建っており、この中には、閑上地区の震災や津波についての映像展示などがある。ここで観光客向けに語り部が行われる場合もある。そのため、被災地観光のルートとして組み込んでいる団体客も多い。

⁵⁸ ゆりあげ港朝市のように、閑上地区の「漁師町」としての歴史をつなぐ営みとして、継続されてきたものとしては、閑上太鼓も挙げられる。

⁵⁹ E さんヒアリング 2020 年 12 月 18 日

① 語り部活動

住民が新規におこしていく営みとして、第一に、語り部の活動が挙げられる。語り部の活動では、主に、語り部自身の被災経験などを生の語りで届けることを通じて、聞き手に、震災の教訓を伝え、防災・減災の取組みに役立ててもらうことなどを目的としている⁶⁰。また、同時に、被災の経験を語ることで語り部自身が心の整理をする機会を設ける目的も有している。関上地区には、語り部活動を行う団体がいくつか存在する。団体によって、津波の際の映像資料や、震災前後の関上地区の写真や地図、また、実際に関上地区を歩いて説明するなど、その語りの方法はさまざまである⁶¹。

関上地区での被災やその後の避難生活の経験は、一人ひとり異なる。語り部の K さんは、自身の語りは、「関上に住んでた何分の 1 の人の語り」で、住民によって経験は異なるからこそ、「様々な人の声を聞いてほしい」と話す。

このように、同じ関上地区の住民同士でも、被災やその後の避難生活の経験がそれぞれに異なるために、次のようにも感じたと K さんは語る。

「周囲の住民が「ぜんぶ流れちゃった」という一方で、私の自宅は、1 階部分は流出したものの、建物自体や 2 階にあったものは残った。だから、同じ関上の被災者といえども、そういうことばとは感じ方が違う、しっくりこない。」

(K さんヒアリング 2019 年 12 月 13 日)

このように、一人ひとりの経験が異なるゆえに、他の住民の語りを聞いたときに「しっくりこない」と感じる場面があるという。そうした「しっくりこない」感じ、住民同士で共有しきれない言葉を語る場所としても、語り部の活動は機能しているといえる。というのも、こうした語り部活動の参加者（聞き手）には関上地区外の人が多く（観光客や、学生の修学旅行、研修など）、関上地区の住民は滅多に訪れない。自分の語る相手が、第三者的な他者であるからこそ語りうる言葉もあり、そうした意味で、語り部の活動が、語り部自身にとって「しっくりくる」語りを紡ぐことのできる場となっているとも考えられる。

② 聞き語り活動

住民が新規におこしていく営みとして、第二に、住民による聞き語りの活動が挙げられる。ここでは、その例として、関上地区に住んでいた R さんが行った聞き語りについて見てい

⁶⁰ ヒアリングをした語り部の語りの中では、震災前から「関上に津波は来ない」という認識があったことや、「地震があったら津波の用心」という石碑の存在を住民の多くが知らなかったこと、住民の避難が遅れたことが聞かれた。そういった教訓を踏まえて、自身の震災の経験を語りつづけている。

⁶¹ 筆者自身も、現地でのヒアリング調査とは別に、何度か語り部の方に案内をしてもらった。2019 年 12 月 14 日には、「関上ウォーク」として、語り部 2 名と共に関上地区と名取川を挟んだ対岸の仙台市藤塚地区を歩き、案内してもらった。震災前の自身の生活の様子なども交えながら、震災前後で関上地区のまちなみがどのように変化したのかなどを伺った。

きたい。

みやぎ民話の会⁶²に所属し、幼少期から学生時代を閑上地区で過ごした R さんを中心に、震災後、閑上地区に居住していた人々約 10 名を訪ねて聞き語りが行われた。かつての生活や生業を聞く形で、聞き語りをし、それを 130 ページほどの一冊の本にまとめて出版した（『「閑上」 津波に消えた町のむかしの暮らし』）。

この聞き語りで特徴的なのが、地区住民の方言である閑上弁での語りを、そのままの文章として残して記載している点である⁶³。これについて R さんは、「方言で書けば、閑上って個性や雰囲気、こういうまちがあったっていうのを残せるかな」という意図で、R さんも自身の閑上地区での思い出を振り返りながら、閑上弁での会話を楽しみつつ、聞き語りをした。

2012 年 4 月に聞き語りを始めて以降、その記録と編集などを経て、2014 年 10 月に出版された。冊子は、名取市や閑上地区の公共施設などに配布されたほか、人づてで情報が広まり、R さんの元に、ぜひ欲しいという電話がかかってきたという。

「この本欲しいって随分言われた。本ありませんかって。閑上出身だけど、よそにいった人からよく電話をもらう。一番欲しがったのは、昭和初期の人たちだよね。一番懐かしいんじゃない。自分たちの生活がそのまま出ているからね。で、その下の人達はあんまり興味ないんじゃない。自分たちの生活でないから、もうね。たぶん、昭和二桁あたりの人達までは、すごく、わあ閑上だという感じがするだろうなと思う。」

(R さんヒアリング 2020 年 10 月 6 日)

R さんや聞き語りの語り手と世代の近い「昭和初期の人」から「昭和二桁あたりの人」にとっては、この聞き語りの内容は、自分が閑上地区で過ごした時間を彷彿とさせるような文章であった。また、閑上弁という、この世代の人々に耳なじみのある文体で書かれている

⁶² みやぎ民話の会は、宮城県を中心に東北地方の民話探訪・民話集編纂に従事してきた小野和子によって、1975 年に設立されたサークル。同県内を中心に山の村や海辺の町を歩き、そこで聞いた民話を記録し、その一部を『みやぎ民話の会叢書』としてまとめている。（せんだいメディアテークホームページ「みやぎ民話の会「民話 声の図書室」プロジェクト CD 第 1 弾が完成しました」、<https://www.smt.jp/projects/minwa/2019/05/-cd1.html>、2021 年 1 月 3 日閲覧）現在、約 20 名のメンバーが参加しており、特に震災後は、宮城県の会員だけでなく、震災後、東京などか他地方からも参加者がある。

⁶³ 例えば、閑上地区の秋の風物詩であったいわし編みについて、閑上弁で次のように記載している。

「秋になるといわしがとれるんだっちゃ。いわしは、たて網で獲るんだっちゃね。そうずっと業者がさくば一艘なんぼって買ってね、貞山堀の土手さ揚げんのね。さくばさ積んできたいわしば、むっしょ（ござ）の上さ、ざっと揚げて、そごさ塩ば沢山ふって、ざっざっとむしょばゆすって混ぜるんだっちゃ。そずっと、女の人だちが土手さ並んで、その魚編むんだっちゃ。女の人だちの内職なのね。」（早坂ほか編 2014：9）

からこそ、「自分たちの生活」をそのまま感じられる内容になっていたと考えられる。

Rさん自身も、この冊子を読み返すと以下のように感じると話す。

「閑上がば一つと出てきたというか、すごくまちの姿がよく現れているなと思う。普通、いろんな記録があるけども、これはそれぞれの人に語ってもらって、しかも閑上弁で飾りっ気なくしゃべって。すごい閑上がでてきてますね、たちあがってきてる。他の記録よりもずっとずっとそれを感じるわね。」

(Rさんヒアリング 2020年10月6日)

このように、閑上弁でいきいきと語られた震災前の閑上地区の姿が、文章として残されていることで、その時代を閑上地区で過ごしてきた人にとっては、かつての閑上地区の姿が「たちあがってきてる」ように感じられるという。震災後、すっかり変わってしまった閑上地区に対して感じる「喪失」を埋めるように、自分にとっての閑上地区の姿を再び取り戻そうとするような営みを、この事例の中に見出すことができるといえる⁶⁴。

③閑上復興だより

住民が新規におこしていく営みとして、第三に、地区住民が中心となって発行してきた地域紙の「閑上復興だより」が挙げられる。これについては、次章で深く考察するので、ここでは概要の説明にとどめる。

閑上復興だよりは、2011年10月から閑上復興だより実行委員会（現在、一般社団法人ふらむ名取に改称）が発行してきた地域紙である。2011年9月に名取市役所前広場で再会の場になるようにと、「閑上復興いも煮会」を開催し、それに参加した閑上地区住民の「復興の状況が知りたい」「閑上の人に会いたい」という思いをきっかけに、NPO法人ロシナンテスの協力のもと、閑上復興だよりの発行を始めた。2か月に1回のペースで発行しており、現在終刊号の第60号まで発行している。住民の声を発信する、ローカルな情報を提供するということを念頭に記事の執筆を行ってきた。復興計画やその進捗状況を伝えることに注力し、計画の是非を問う住民アンケートも実施した。それと同時に、小中学校での子どもたちの様子や、取り戻しつつある日常の様子なども写真や住民からの寄稿を交えて伝えてきた。2020年3月に閑上復興だよりは終刊し、現在は閑上だよりという名称で、年4回程度の地域紙の発行を継続している。

⁶⁴ この他に、閑上地区の聞き語りの資料としては、五十集の生活や生業の様子を記した『おなご五十集の話』も挙げられる。震災前、五十集の方に対して行われた聞き語りの文集をまとめ、震災後の2013年に発行された。資料として残しつつ、「震災で辛い思いをされている人達の励みになれば」という思いが込められている（荒川 2013）。

4-5. 小括：ローカル・アイデンティティ構築の営みの考察

1) 震災前後でのローカル・アイデンティティ構築の営みの変容

ここまで、本章では、関上地区でのローカル・アイデンティティの構築の営みの変容を見てきた。関上地区において、震災前のローカル・アイデンティティの営みとしては、当たり前前に存在していた生活や環境、人とのつながり、そういったものの総体がそれを構成していたといえる。しかし、それらは日常生活において、強く意識される場面は少なかった。Rさんの語りを借りると、「なくなってはじめて」気づかされるものであった。

住民からは喪失したものについて、「自然とか風景とか、環境」、関上地区のコミュニティ、という語りが聞かれ、これらの総体として自身にとっての「ふるさと」を喪失したという思いが読み取れる。また、復興計画が進展する中で、「新しい関上」が立ち上がり、「自分の関上」はますます遠くなっていった。震災後の時間の経過と共に何重もの喪失を経験したといえる。

そうした喪失を経験しながらも、関上地区では過去と現在の関上地区を「つなぐ」ような営みが現れてきた。例えば、ゆりあげ港朝市などは、震災前の場所に2013年に再開し、いち早く関上地区の復興のシンボルとして、その営業が再開し、多くの観光客が集まった。また、地区内での行事なども段々と再開されるようになる。

しかし、Eさんの盆火についての「なんか違う」という語りにみられるように、震災前の営みを単に継続しただけでは、違和感や「なじまなさ」が残った。そうした営みがしっくりこないがゆえに、まだ自分にとっての関上地区の「物語」を紡げない状態だったのである。

そういった「なじまなさ」を克服するべく、住民の語る行為を主軸に置いた「紡ぎ直し」の営みが現れてきた。

2) 「紡ぎ直し」の営みにおける「相互行為」と「物語」

本項では、その「紡ぎ直し」の営みについて、若干の考察をしたい。

それにあたりここで、浅野（2001）、の自己の構築、もしくは自己のアイデンティティ構築に関しての議論の言葉を引用しつつ、ローカル・アイデンティティにもそれを応用しながら、その構築の場を考えていくキーワードとしたい。

浅野は、「自己物語論」の中で、自己が自分自身について物語ることを通して産み出されることと、その物語る行為が本質的に他者に向けられたものであるとしている。第1章の再掲になるが、「自己が自己物語によって産み出される」ということは、換言すると、自分自身の人生のエピソードの選択と配列を通してはじめて「私」が現れてくるということであり、また、語りの内容の選択と配列を行い、他者を「納得させる」ように語ることによって、語られた自分（現在から今に至るまでの自分）ははじめて他者との間で共有された現実となるのである。（浅野 2001）。

つまり、ローカル・アイデンティティ その物語を共有する他者に誰を想定するのかにより、語りの内容が調整され、他者にも納得してもらえる物語として、共有されるのである。

これらのキーワード「他者」と「物語」を用いつつ、「紡ぎ直し」の事例それぞれを考えてみる。

本章では、「紡ぎ直し」の営みとして、語り部、聞き語り、閑上だよりを事例として挙げた。

まず、語り部について、既に見てきたとおり、語り部の活動は主に、閑上地区外から訪れた観光客やに対して、語り部自身の被災経験などをもとに、震災の教訓や、防災・減災の取り組みにつながるような物語として語られる。閑上地区の写真や映像などを共有しつつ、閑上地区外の人である聞き手に対しても、自身の閑上地区にまつわる物語がより共有されやすいような工夫をしているといえるだろう。

また、語り部の語りは毎回、同じだということではなく、聞き手の反応や、自分にとって閑上地区や震災がどういう意味を持つのかを考え、「物語」として、紡ぎ直されていく。これは、語り部の活動が「被災の経験を語ることで語り部自身が心の整理をする機会」を与える目的を有していることからそのように言えるだろう。

次に聞き語りについて、本稿で扱った事例では、閑上地区の住民同士でかつての生活や生業を思い起こしながら、閑上弁で話した内容を、聞き語りとして編集・発行したものである。この事例については、語り手と聞き手の R さんとで、かつての閑上地区での生活を語り合ったその時間も「紡ぎ直し」の営みであるといえる。また、聞き語りの冊子が、震災後、散り散りに住まう閑上地区の住民の手に渡った際に、震災後すっかり変わってしまった閑上地区に対して感じる喪失を埋めるように、自身の思い出と重ね合わせながら、自分にとっての閑上地区の姿を再び取り戻そうとするようなこの営みもひとつの「紡ぎ直し」の営みと捉えることができよう。このことは、冊子の発行後、特に昭和初期の人を中心に、冊子が欲しいという反応があったことから伺える。「自分たちの生活がそのまま出ている」閑上弁の文章だからこそ、特に昭和を閑上地区で過ごした住民同士に共有されやすい物語だったのだろう。

この文字として記録される物語という点は、次章で詳しく見ていく閑上復興だよりも共通する点である。

閑上復興だよりは、主に、閑上地区の住民に向けて、住民の声を発信する、ローカルな情報を届ける地域紙として発行されてきた。紙面では、復興計画やその進捗状況、また、閑上地区での生活の様子などが伝えられてきた。そこには、今現在の閑上地区、震災前の閑上地区、どちらかを伝えるのではなく、その両方をつなげるように、震災後の時間の経過に応じて、紙面の内容を変更しながら、情報を届けてきた。このことについては、次章で詳細に見ていくこととしたい、

地区住民による「紡ぎ直し」の営みについては、他者に誰を想定するかで、閑上地区とい

う単位を認識しつつ、語られる物語が変わっていくと言ええる。他者に共有される物語として、語り手も自分の語りを調節しながら、自分にしっくりする語りを見つけ、自己と閑上地区について語ろうとしていることが分かった。

次章では、この「紡ぎ直し」の営みのうち、現在まで続く営みである閑上地区の住民が発行する「閑上復興だより」に着目して、更なる考察をしたい。

第5章 ローカル・アイデンティティの紡ぎ直し ―閑上復興だよりに着目して

本章では、閑上復興だよりと呼ばれる、閑上地区で震災以降発行され続けてきた地域紙を事例として、その活動の経緯や、紙面で住民によって語られる内容を見ていき、閑上復興だよりが、ローカル・アイデンティティの紡ぎ直しにおいて持つ意味について考察する。

5-1. 閑上復興だよりとは何か

東日本大震災後、閑上地区において「閑上復興だより」（以下、復興だより）という地域紙を発行してきたのが、一般社団法人のふらむ名取⁶⁵である。

復興だよりは、仮設住宅や陸区の町内会などの各家庭にポスティングで配布されてきたほか、名取市の公共施設や、再開した商店、メイプル館などの観光施設において無料で配布され、誰でも手に取ることができる。また、協賛金を出すサポーター会員にも郵送で届けられてきた。

紙面は、B4の見開き4ページで構成され⁶⁶、カラー刷りで、文章だけでなく、季節ごとの閑上地区の写真なども掲載されている。（図22）復興計画やその進捗状況を伝えることに注力し、計画の是非を問う住民アンケートも実施したことがある。同時に、小中学校での子どもたちの様子や、取り戻しつつある日常の様子も伝えてきた。

閑上復興だよりは2011年10月から1、2か月に1度のペースで発行され、2020年3月発行の60号をもって終刊した。2020年夏からは「閑上だより」として、3か月に1回、年4回の発行を続けている。

⁶⁵ 「ふらむ」という名称は、ノルウェーの木造探査船「フラム号」からとっている。この船が1893年に北極へ探査に向かう途中、グリーンランド海で氷に閉じ込められ漂流しつつも、その後3年をかけて脱出し、帰港したことから、「前進」の希望を込めて名付けられた。

⁶⁶ 時には6ページに及ぶこともあった、特に閑上地区の復興計画の策定議論が紛糾していたころ、地区住民にわかりやすく説明できるようにと多くの紙面が割かれた。



図 22：興上復興だよりの紙面（左：第 1 号、右：第 26 号）

なお、一般社団法人ふらむ名取は、復興だよりを発行してきた「興上復興だより実行委員会」、2012 年より語り部活動を行ってきた「興上震災を伝える会」、仮設住宅での傾聴活動や交流の場などの居場所づくりを行ってきた「名取交流センター」の 3 つの活動の機能を一つに集約する形で、2017 年 4 月から一般社団法人として活動を継続している⁶⁷。

活動資金は主に、復興だよりに掲載する広告費（主に興上地区の商店など）、寄付、サポーター制度によって集められる。それに加えて、2014～2015 年度には、赤い羽根共同募金により集められた災害ボラサポ助成金⁶⁸や、2018 年度から 2019 年度には、宮城県のみやぎ地域復興支援助成金を活用して活動が行われた。

5-2. 復興だより発行のいきさつ・経緯

復興だよりを発行するきっかけとなったのが、2011 年 9 月 19 日に名取市役所前広場で開催された「興上復興いも煮会」だ。知り合いの安否すらわからない状況の中、再会の場になるようにと企画され、これに参加した興上地区住民の「復興の状況が知りたい」「興上の人に会いたい」という声を受け、住民が本当に求める情報を届けることを決意し、復興だよりの発行に向けて準備を開始した。

この興上復興いも煮会の開催には、ふらむ名取代表の E さんが、興上地区のがれき撤去の支援に訪れていた NPO 法人ロシナンテス⁶⁹（以下、ロシナンテス）と関わりを持った

⁶⁷ 一般社団法人ふらむ名取、2018、「ゆりあげ前進 もう一度 心をひとつに vol.2」

⁶⁸ 中央共同募金会が設置する災害ボランティア・NPO 活動サポート募金のことで、ボランティアや NPO の支援活動を支える資金支援の仕組みとして機能している。

⁶⁹ ロシナンテスは、2006 年に設立された NPO 法人で、スーダンやザンビアなどの途上国で、診療所の開設や給水所の整備、学校建設などを通して住民に医療を届ける活動を行っている。東日本大震災に際しては、避難所の巡回診療、がれき撤去作業、寺子屋の開校などの活

ことに端を発する⁷⁰。

2011 年の夏に住民が開いた復興ミーティングで、同席したロシナンテスの理事長からの「関上地区で一番盛り上がる行事は何か」という問いかけをテーマに話し合いが行われた。関上地区出身の参加者からは、毎年開催されていた地区民運動会が、いの一番にあがった。子どもから大人、お年寄りまで参加し、町内会ごとに B B Q などの親睦会なども運動会の後に開催されていたという。そこで、この地区民運動会を再開させようという運びになった。

しかし、震災直後の当時、関上地区の住民は名取市の仮設住宅や、他市町村の親せき宅など、散り散りに避難生活を送っていたことに加え、運動会を開催するためのグラウンドや道具の準備が困難なことから、運動会の開催は見送った。別案として、いも煮会という意見が出て、関上復興いも煮会（以下、復興いも煮会）として、秋に開催されることとなった。

復興いも煮会の目的の一つは、関上地区の住民の所在を確認することであった。そこで、参加者に住所と電話番号を記入してもらい、その用紙をいも煮の引換券とすることで、所在確認を行った。最終的に、震災時に関上地区に居住していた住民のうち、300 件ほどの現住所が集まった⁷¹。これをもとに、初期の復興だよりは集まった住所へと配送された。

この復興いも煮会の様子や参加者のコメントを一面に記載する形で、復興だよりの第 1 号が 2011 年 10 月に発行された。紙面冒頭では、関上復興だより委員会から、発行の経緯について、以下のように記載している。

「九月十九日に名取市役所で開催された関上復興芋煮会では、「関上の人に会いたい」その強い気持ちで悪天候の中、多くの方⁷²が来場され、お互いを懐かしみ笑顔が満ち溢れていました。参加された方々は口々に、「知り合いに会えて嬉しかった」「仮設住宅に住んでいないから情報が無く関上の情報が欲しいから来た」とおっしゃっていました。こういった要望に少しでも応えられたらとの思いで、関上復興だよりの発行に至りました。関上の復興状況のお知らせ等を通し、情報の共有そして、知人が掲載された記事を読み笑顔になっていただけたら嬉しい限りです。」

（関上復興だより第 1 号「関上復興だより発行の経緯」）

第 1 号の発行に際しては、ロシナンテスの支援を受け、関上復興だより実行委員会を結

動を行った。（NPO 法人ロシナンテスホームページ、<https://www.rocinantes.org/about/>、2021 年 1 月 16 日閲覧）

⁷⁰ 2011 年 3 月 14 日にロシナンテスの理事長が名取市内の避難所に訪れて以降、その避難所の体育館のステージで、関上地区の住民に集まったことがきっかけであった。この集まりに親世代や若手が参加する中で、「これから関上をどうするのか」ということが議論された。避難所の解散後も、この集まりが定期的に開催される中で、復興いも煮会や、復興だよりの案が出てきた。（一般社団法人ふらむ名取、2018、「ゆりあげ前進 もう一度 心をひとつに vol.2」）

⁷¹ 一般社団法人ふらむ名取、2018、「ゆりあげ前進 もう一度 心をひとつに vol.2」

⁷² 1,000 人以上が来場した。当初、用意されていた芋煮は 1,000 食であったが、それが行き渡らないほどの人手であった。第 1 号の紙面には、「私達が考えていた以上に関上のみなさんの『誰かに会いたい』気持ちが強かったのでは」とある。

成し、取材・編集・発行作業に取り掛かった。

取材・編集・発行作業にはEさんをはじめとして閑上地区の住民数名が関わる事になるが、これに携わった経験のある人はいなかった。そこで、ロシナンテスのメンバーが持参した、福岡市の玄界島の「玄界島復興だより」を参考にして、作業が行われた。玄界島は、2005年3月20日に発生した福岡県西方沖地震で、島民700名が全島避難を余儀なくされ、その後3年間避難生活をしていた。玄界島復興だよりは、復興に向けた島民の自主的な組織（島民による選出で委員を選出した）である「玄界島復興対策検討委員会」が、島の復興の進捗を伝える広報誌として発行し、事業計画の解説から、会議の議事録、工事の進行状況などを掲載した。

玄界島復興だよりを何部か手に取り、記事を読みながら、「こういうやつならできると」、Eさんは感じたという。特に、玄界島復興だよりの裏面に記載された、職員の顔写真と仕事内容から着想を得て、「顔の見える新聞にしたい」と考えた。これには、顔見知りで名前は分からない人でも、写真を見た時に、安否を確認して安心してもらいたい意図があったためであった。

閑上復興だよりの発行は、人の入れ替わりはありながらも、多い時で、12,3名ほどの閑上地区住民が参加した。うち、生まれも育ちも閑上地区というのはEさんと2、3名で、他のメンバーは閑上地区に嫁ぐなど、引っ越してきた人が多かった。2019年12月時点で、復興だよりの発行で、中心となって動いているのは5名ほどである。震災から数年が経つ中で、それぞれの生活の変化などにより、40～50代を中心に参加が難しくなるメンバーが増えたという。

その中で、代表のEさんは、創刊から現在まで、記事の編集作業に中心となって取り組んできた。Eさん自身は生まれも育ちも閑上地区で、幼い頃から、閑上地区の町区（閑上3丁目）で育った。幼少期、学校でのクラブ活動や、近所に住む閑上風土記の編纂者から閑上地区のことを聞いて育ったことが、現在の活動にもつながっているという。高校生までは、閑上地区に対して抱くのは「田舎で、汚いし、臭いし…」（水産加工工場などでの公害による）と、良い印象ばかりではなかったようだが、大学生になり仙台市に通い、他の地域出身の学友たちと話す中で、「閑上っていいところじゃん」と、地元である閑上地区の良さを認識していった。

5-3. 紙面の内容の変遷と読者からの反応

2011年10月から2020年3月まで、合計で60号にわたり復興だよりが発行されてきたが、その紙面の内容は、住民生活に焦点をあてながら、復興計画の進展とともに、閑上地区の施設や商店の再開のお知らせや、地区の子どもたちや行事の様子、日常の風景など、段々と変化していった。

ここでは、実際の紙面の内容を引用しつつ、Eさんへのヒアリングからそこに込められた

意図などについての語りも参照しながら、その内容の変遷を追う。

まず、一貫しているのが、「住民に復興の状況をわかりやすく伝えたい」という思いである。関上地区の復興計画が策定するまでは、復興計画や諸協議会での議論の内容を、解説も含めながら仔細に記述した。例えば、第2号から第20号にかけては、関上復興まちづくり推進協議会における市の答弁や意見交換などを伝え、第4号、第5号では、「復興キーワード」として、「換地」、「減歩」、「T.P.（東京湾平均海面）」、「市街化区域」といった言葉の解説が掲載されている。

しかし、最初の頃は、記事の執筆について慣れないこともあり「俺が書いたんじゃ私情が入る」状態で、記事内容に偏りがあったとEさんは話す。そこで、特に、協議会についての記事は、ロシナンテスなど外部の人に相談をして執筆すると決め、執筆を行った⁷³。

最初は模索しながらの取材・編集・発行であったが、第4から第6号の頃に、その後の復興だよりも通底する、こだわりが見られるようになってくる。

第4号では、「読者の声」というコラムで、地域住民の声が届けられた。名前・顔写真・旧／現住所とコメントを掲載し、それぞれの被災体験や、現在の生活、今後関上地区に居住するかどうかの思いを掲載した。「顔の見える新聞にしたい」というEさんの思いが紙面に反映されたかたちである。また、第6号の取材で、Eさんが1960年のチリ地震津波と東日本大震災の津波の両方を経験した男性の話を聞いた際に、現在の情報だけでなく、「震災や防災のことを伝えなくては」という思いが芽生えたという。

また、この頃に紙面アンケートも実施し、読者からのニーズにあった紙面づくりを進めていく中で、復興だよりに対する「住民の見る目が変わった」という。

次に、第14号から第18号に特徴的なのが、「丘区⁷⁴の声」というコラムである。名取市では、関上地区のいわゆる町区を土地区画整理事業の事業区域に指定したが、小塚原北、小塚原南、牛野、大曲、高柳の5地区から成る陸区については、この事業区域には指定されなかった。復興だよりでは、このコラムについて以下のように記載している。

「本紙では、東日本大震災の特に津波による被害の大きかった関上地区全体の復興を願い、情報発信をしています。この復興を成し遂げるためには、地区に住む住民の声をよく聞き、現状を正確に知り、すべての方の知恵と力を結集して取り組まなければなりません。そこで、「丘区の声」と題し、丘区の現状とこれまで大きく取り上げられることのなかった声をシリーズとして掲載することになりました。」

（関上復興だより第15号「丘区の声—牛野地区—」）

⁷³ その他の記事の編集については、各メンバーに執筆を任せつつも、Eさんが最終的な文責を担った。編集の方針については、時にメンバーと意見が合わない場合もあり、意見の相違を理由に活動を抜けていく人もいた。

⁷⁴ 本稿では陸区と表記しているが、ここでは復興だよりの記載に即して、丘区と表記する。

また、Eさんはこのコラムを記載した意図について、次のように語る。

「陸区は復興計画から除外されていた。流出も少ないし、震災前は、市街化調整区域だった。市としては、閑上として現地再建をするってことを言っていたんだけど、陸区の住民にとっては、「同じ閑上なのに復興支援が届かない」という思いがあった。行政も説明不足だったし。高柳、小塚原、大曲、牛野の4つの陸区のなかでも感じ方はまちまちで、陸区の住民は、どこにも自分たちの声を発することができなくて、説明会も門前払いになっている様子を見たことがある。新聞記事を書いていたら、陸区の方から「いつ来てくれるんだ」ということを言われたんだよね。」

(Eさんヒアリング 2020年7月17日)

第14号から第18号で、陸区の5地区それぞれを取材し、住民から寄せられた声をまとめた。例えば、牛野地区では、農業の再開に向けて農業復興組合を立ち上げ、農家の30名ほどを中心に農地の復旧作業をしたことや、2年間にわたる農地の整備の結果、2014年春から作付けを開始する予定であること、それらの復旧作業の中で、若い世代も含めて、作業場が様々な情報が入る社交場となり、震災や津波についての話題も徐々に落ち着いて語れるようになった、という陸区の生活の現状が記載された(閑上復興だより第15号)。

また、震災後の姿だけでなく、住民から寄せられた文章や写真をもとに、震災前の閑上地区の姿も掲載された。

特徴的な記事の一つが、「なつかし写真館」という小さなコラムである。このコラムが始まったのは、第12号(2012年11月)からで、Eさんの元に知人から、「何か使えないだろうか」ということで、送られてきた震災前の閑上の写真がきっかけだったという。「なつかし写真館」に初めて掲載されたのは、閑上地区にあった「ももや」という食堂のかつ丼の写真だった。

「私自身(写真を)見ていて「あー、なつかしい」という思いだった。その中の一つが「ももやのかつ丼」。たいしておいしいわけではないが、うまいっていうか、閑上のごはんものといえどここだった。思い出の味かな。写真は私が選んで掲載していた。ももやのかつ丼は、かわまちテラスで復活したんですよ。」

(Eさんヒアリング 2020年7月17日)

もう一つ、震災前の閑上地区の姿の記事で特徴的なのが、第21号から第24号にかけて掲載された「閑上随想」というコラムである。読者から寄せられた、広浦や須賀の震災前の

様子についての文章が乗せられた。

このコラムを載せようとした背景としては、閑上地区の被災市街地復興土地区画整理事業の事業計画が決定した頃（2013年11月）、「こんな計画はだめだ」、「昔を振り返ることを取り入れよう」という思いがあった。そこで、地区住民から寄稿してもらう形で、かつての閑上地区の生活を振り返るようなコラムを記載したのである。

このように、復興だよりでは、震災直後から住民が必要としている情報を届ける、ということ徹底しつつ、復興計画の進展や地区コミュニティの変化にともない、記事の内容も柔軟に変えながら情報を発信していったといえる。

では、このような復興だよりの情報発信に対して、読者はどのような反応をしめしたのだろうか。

もともと閑上地区で生まれ育ったEさんは、震災前からの近隣との人脈を活かしつつ、取材や配布を通して、閑上地区の住民と「悩みとか、小さなことでも打ち明けてくれる」関係性を構築してきた。そのため、Eさんの携帯電話には、よく読者からの連絡が届き、復興だよりへの感想を直接寄せてくれることもあるという。

しかし、発行当初の読者からの反応は、必ずしも好意的ではなかった。復興だよりの読者である、閑上地区住民の震災後の生活は、戻りたいけど戻れない／戻らない／戻りたいけど戻らない人、などその実情は様々だった。ゆえに、行政の「現地再建」の復興計画に対して意見は様々であった。復興だよりについては、陸区のある地区では、市からの業務委託ではないか、と配布を断られたこともあった。一方で、閑上地区には戻りたくないが「復興だよりだけは送って」という読者もいた。

また、震災後の避難所生活や、仮設住宅の生活など、どうしても閑上地区を離れて生活せざるをえない人々にとって、復興だよりは一種の「ふるさと」を伝える新聞としての役割を担っていた。これについて、Eさんは特に印象的だった読者からの反応として、閑上地区外で避難生活をしていた読者からの「まだ私のふるさとはあったんだ」というコメントがある。この言葉を聞いたとき、復興だよりの発行を「やってよかった」と痛感したという。

このように、継続的な活動の中で、Eさんを中心とした人とのつながりができ、それこそが、復興だよりが閑上地区の住民に広く受け容れられる理由の一つになったと考えられる。

5-4. 「閑上復興だより」から「閑上だより」のこれから

閑上復興だよりは、2020年3月に最終号の第60号を発行し、その後、「閑上だより」に、名称を変更し、季節毎に年4回発行している（現在、2020年冬号No.3まで発行）。

この「閑上復興だより」から「閑上だより」への名称変更についてEさんは次のように話す。

（閑上復興だよりの今後について、）「現在58号を発行したが、60号で終刊にする予定。前にテレビのインタビューで、いつまで続けるのかっていうのを聞かれたときに、「自治会（注：町内会に同じ）が、独自で活動を始めるときが潮時かな」っていうに話していて。40号半ばのころに、このまま2か月にいっぺんだったら、60号くらいかなって思ってたんだけど、今年5月のまちびらきで、ハード面もだいぶ整ってきたし、読者（筆者注：閑上に住んでいない）から「復興したんじゃ？」っていう声が聞こえてきたり。まちびらきでも「よかった、復興して」っていう風に言われて、やっぱ終わりにしようと思って、今年の春先に終刊することを決断した。」

（Eさんヒアリング 2019年12月13日）

Eさんは活動の中で、「自治会が独自で活動始める」頃に、閑上地区にとって復興のひとつの区切りが見いだされるだろうと考えた。その中で、2019年5月に開催された、「閑上地区まちびらき」のイベントが節目となった。そこで、Eさん自身も、ハード面での「復興」はほとんど完了してきたことを実感し、かつ、読者からの「よかった、復興して」という声があったことで、ちょうどキリのよい数字でもあった第60号で終刊することを決意した。

ただ、「終わりにしようと思って」という言葉通り、復興だよりの発行は終わりを迎えたが、復興だより第60号の発行と並行して、「閑上だより」の編集作業をすすめていった。ここには、復興のひとつの区切りは見出されたが、復興だよりで継続してきた顔が見える地域の情報はこれからも継続していかねば、というEさんの気概を感じることができる。閑上だよりについて、復興という言葉を取ったことについては、以下のように話す。

「(復興だよりという名称で) どうしてもやっていると(紙面の内容が)「復興」に關していないじゃないか、っていう声もあったり。自分自身も復興という言葉にとらわれ過ぎて、安心できない部分もあった。」

「(閑上だよりでは)「閑上のまちはこうだった」ということと同時に、「新しくなったのはこうですよ、みなさんの自立を教えてください、閑上の新たな日常はこうですよ」という内容を伝えていく。・・・ここ(今)は割り切って、ここ(閑上地区の新たな生活の土台)はできたんだから・・・」

(Eさんヒアリング 2019年12月13日)

復興という言葉があるがゆえに、地域紙として復興を伝えるべきだという読者からの反応があり、Eさん自身も、復興という言葉にとらわれていた部分があった。復興だよりでは伝えきれなかった「閑上のまちはこうだった」、「閑上の新たな日常」といった内容を閑上だよりでは盛り込もうとしている。

では、復興という言葉を取った「閑上だより」の発行をいつまで続けるのかというと、それは「普通のまちに戻ったら…」とEさんは話す。Eさんにとっての「普通のまち」とはこういった状態を指すのか。

Eさん:「普通になったら、(閑上だよりで)2・3号お知らせ出来たら、あとはいらなくなるわけよ。いらなくなるというか、他の人がつないでくれたら、そっちにバトンタッチはしますよ。これを引き継いでもらってもいいし、新たにこういう形でっていうのがあれば、ああいいですよって、バトンタッチをします。そういう風に出てくれば一番いいですね。」

筆者:「Eさんの思う、閑上のまちの普通の姿って、今はまだ違いますか?」

Eさん:「うん、やっぱり、地元の人をね、今は大切にしていない。大切っていうか、地元住民にやさしいようでやさしくない。よそよそしいというか。」

(Eさんヒアリング 2020年12月18日)

「よそよそしい」という言葉の意図としては、かわまちテラスや朝市などが観光地となり、地元住民がいきづらい雰囲気醸し出していること⁷⁵や、観光客が増える中で、「心無いことを言っていたり、ポイ捨てをする人」がおり、それを地区住民が自ら浄化できるくらい

⁷⁵ これに通ずる語りとして、公民館職員のNさんの語りの中に「観光地化」という言葉がある。筆者が、閑上地区に新たにできたいくつかの観光施設に立ち寄ったことを話すと、「どんどん観光地化が進んでいるんだよね」と話した。(Nさんヒアリング 2020年11月15日)

にまでコミュニティのつながりが強くなっていないことを挙げる⁷⁶。

こういった現状も受けて、ふらむ名取では、地域紙の発行から発展して、地区コミュニティでの活動も展開している。例えば、閑上だよりなどの情報に関して「自分で情報を取りに行く姿勢」をつくれるよう、ポスティングの方法に工夫⁷⁷を凝らし、また、ふらむ名取が実施する町内会などのコミュニティの活動でも、「お膳立てをしすぎず、住民自身にやってもらう」ように心掛けているという。このように、地域紙の発行や、それを通じた閑上地区の住民とのつながりの中で見えてきたニーズや課題を拾いつつ、地域の活動への展開を進めている。

5-5. 小括：ローカル・アイデンティティの紡ぎ直しにおいて復興だよりが持つ意味

以上で見てきたとおり、閑上復興だよりとそれに続く閑上だよりでは、閑上地区の情報を、震災復興の過程や住民の生活の変化にあわせながら細やかに記述し、「住民の声を届ける」「顔の見える新聞」として地区住民へと届けてきた。

紙面には、E さんをはじめとした復興だよりの発行に携わるメンバーの取材をもとにした記事だけでなく、住民から寄せられた声を載せた記事が書かれてきた。そのため、復興だよりで語られる内容としては、震災直後から復興計画を策定する頃までは、地区住民の被災後のありのままの生活の姿や、閑上地区に戻る・戻らないという選択の間で揺れ動く心の葛藤などが、丁寧に記述されてきた。また、復興事業計画の進展に合わせて、日々変わりゆく閑上地区の姿が、写真などを交えて伝えられた。そのような変化の中で、ただそれを受け入れるのではなく、閑上地区のかつての姿も伝えていこう、と震災前の閑上地区の生活や景色、ささいな日常の一コマなども一貫して伝えられてきた。

そして、この復興だよりは、震災後、市内の仮設住宅や仙台市の住宅など、かつてのコミュニティを離れ、散り散りに生活を送っていた閑上地区の住民のもとへも届けられた。そういった読者からの反応として、「まだ私のふるさととはあったんだ」という声がある。この語りからは、すっかり変わってしまった現在の閑上地区には見いだされにくい、自分にとってのふるさととしての閑上の姿を、この紙面を通じて感じる事ができたという思いが読み取れる。

復興だよりは、地区住民にとって自分の語りを他者と共有できる開かれた場所であり、かつ、その住民の声が紙面上で共有されることで、他の読者にとっては自らにとっての閑上地区を想起させるきっかけを生み出していったといえる。このような営みを通じて、E さんを

⁷⁶ E さんは、この地区住民の自発的な取組みが見られにくい要因として、「多くの人が被災した地区であるがゆえに、まだ（支援を）やってほしい、自分は被災者だ、まだ復興してない、と思う人が多い」からだ話す。

⁷⁷ E さんや閑上だよりを発行するメンバーが町内会などに届けに行くばかりではなく、住民にも積極的にポスティングをしてもらうようにしている。段々と「おれ、やるよ」というように、動いてくれる住民が出てきたという。

はじめとした復興だよりを執筆してきた地区住民だけでなく、読者である地区住民にとっても、自分と閑上地区について思いを巡らせ、語る機会を与えた。また、それらの語りは、記事の形で言語化され、その時々自分や他の地区住民が、閑上地区を認識していたのか、閑上地区やそこでの自己の生活などをどのように語ったのかという記録として残されていく側面も有する。そういった点に、復興だよりがローカル・アイデンティティの紡ぎ直しにおいて持っている意味を見出すことができるであろう。

第6章 総合考察：津波被災地におけるローカル・アイデンティティの紡ぎ直し

本章では、これまでの各章の議論をまとめた上で、第1章で提示した目的に対して、事例地の調査・分析から見えてきた筆者の考察を述べていきたい。

6-1. 研究の視座の確認

本稿では、「地区住民の語りを通してローカル・アイデンティティを再び構築していく営み」をローカル・アイデンティティの紡ぎ直しとして定義し、それが被災地においてどのように営まれているのかということを見てきた。

ここで確認しておきたいのは、本稿の主眼は、ローカル・アイデンティティそれ自体が何かではなく、ローカル・アイデンティティを構築する営みにある点である。大堀が定義したように、ローカル・アイデンティティは同一性と同時に、構築性を有している(大堀 2010)。その点において、ローカル・アイデンティティそれ自体は、変化するのが当然であるためである。

例えば、関上地区のローカル・アイデンティティは、その歴史をさかのぼると、江戸時代から続く漁師町、工業・水産加工団地の立地、ベッドタウン、漁業環境の変化の中での漁師町の模索というような形で、不断に再構築され続けてきたといえる。

従って、ある地域が有するローカル・アイデンティティをただ一つのこうあるべきものとして捉えるのは難しい。また、大堀が、「ある個人が、地域のどの要素を自己のアイデンティティとして保持するかどうかは、当該個人が選択しうるべきで、少なくとも他者から強要されるべきではない」とするように(大堀 2010)、住民にとってのローカル・アイデンティティそれ自体が何であるのかということについて、他者がその評価をすべきものではないからである。

そこで、第1章の先行研究を通じて、アイデンティティ概念をさかのぼりつつ、ローカル・アイデンティティが内包する意味を整理した。ローカル・アイデンティティの分析の視点として、大堀は個人レベル・集合レベルのローカル・アイデンティティを定義できるとした。

被災地において、ローカル・アイデンティティの再構築が重要だといわれるが、では、個人レベルである、住民の視点からいかにようにローカル・アイデンティティが構築されていくのか。そうした住民の営みを、事例を通じて見ることを本稿の目的の主眼に置いている。

6-2. ローカル・アイデンティティ構築の営みの変容

本節では、震災前後で、津波被災地におけるローカル・アイデンティティ構築の営みがどのように変容したのかを考察していく。

1) 喪失の語りにみる、履歴のある空間と自己のつながり

震災前の閑上地区では、当たり前存在していた生活の場や環境、人とのつながり、そういったものの総体が、ローカル・アイデンティティ構築の営みとしての様相を成していたといえる。例えば、町内会を起点としたコミュニティでの地区民運動会やお祭り、盆火などの季節ごとの行事や、また漁師町としての歴史を背景とした、閑上漁港関係者のネットワークがあった。

ただ、それらは当たり前存在していたがゆえに⁷⁸、震災前は気づかれる場面が少なかった。だがしかし、震災を契機に住民にとって数々の喪失の経験があったことで、かつてあったが、今は取り戻すことの難しい営みとして強く認識されるようになったといえる。

その認識は、住民の喪失の語りの中に見出すことができる。例えば、「自然とか風景とか、環境（がなくなった）」、「あのまちの雰囲気は、もう戻らないし」、「全く違うまちが同じ場所につくられている」という語りから、閑上地区に広がっていた生活の景色や、町内会などを拠点としたコミュニティといったものを失ったことが伺える。また、それが一時的ではなく、震災と津波の被害を受けた更地の状態に始まり、土地区画整理事業の進行など、刻々と閑上地区の様子が変化していく中で、何重にも喪失を感じさせる瞬間があったといえる。

そしてこのような何重もの喪失は、Rさんの語りを借りると「人格形成の場としてのふるさと」の喪失でもあった。

この表現に関連して除本は、原発避難者の語りの中に「ふるさとの喪失」という含意を見出している。除本は、広い意味での環境（土地などの自然資源や景観など）をはじめとした、避難元の地に固着した諸要素は回復不可能であり、また、地域社会を元通りにすることはきわめて困難であると指摘する（除本 2013, 2019）。

このふるさとの中には、桑子（1999）のいう「空間の履歴」が積み重なっている。そして、その空間の履歴の中にこそ「わたし」という自己が存在する。自己と空間とは分かちがたいものなのである。とすると、空間の履歴が積み重なるふるさとの喪失とは、自己の喪失にもつながりうる現象であるといえる。

⁷⁸ 本稿では、震災前後でのローカル・アイデンティティの構築の営みの変化に着目しているが、震災前にも変化はあったといえることができるだろう。p.47のFさんの語り（「昔は、田舎だってのもあるけど、横のつながりがあったんですよ。」）にあるように、住民同士のネットワークが強いことが伺える。しかし1970年代以降、ベッドタウンとしての様相が強まる中で、特に若い世代を中心に職場や学校が仙台市や名取市中心部にあり、閑上地区の住民のネットワークに強い重きを置かないという層が徐々に増加したといえよう。またこの時期は、閑上地区を象徴していた「漁師町」としての勢いが陰る一方で、ベッドタウンのように没个性的な空間がつくられていく中で、豊かなローカル・アイデンティティが構築されにくい状況も生まれていたと考えられる。

これらから、関上地区において住民／被災者は、語りに聞かれたような、生活の場や環境、人とのつながりだけではない、何重もの喪失を経験したといえる。桑子（2019）のいう、「空間に積み重ねられた履歴をたどり、履歴に組み込まれた体験を思い起こすときに、ひとは自分の存在を知る」ことの逆を考えると、履歴が積み重なる空間としてのふるさとを喪失した場合、そうした履歴をたどることができず、自分の存在を知り得ない／語り得ないという状態になるのである。

2) 「つなぐ」営みの現れ

しかし、あらゆるものを喪失したのではなく、「つなぐ」営みとして、ローカル・アイデンティティ構築の営みが現れていった。

「つなぐ」営みの一つ目が、ゆりあげ港朝市や関上太鼓、地区民運動会などの行事に代表される「継続」させていく営みである。これらは、震災前にも見られた営みを継続している。特に、ゆりあげ港朝市は、2013年に震災前と同じ場所に再建され、地区住民や観光客が訪れるきっかけをつくった。

このような営みについて赤坂は、被災地としてのムラの再建に際して「それぞれの地域の歴史や風土に根ざし、アイデンティティを支えている文化にたいして、あらためて関心が向く」としている（赤坂 2012）。ゆりあげ港朝市に、関上地区の漁師町としてのアイデンティティを支えている文化としての関心が寄せられ、その歴史や生業をつなぐ象徴的な営みとして、早急に再開されたと考えられる。

しかし、震災前の営みを単に継続すればよいという訳ではない。震災の年に行った盆火での「なんかが違う」という語り⁷⁹にみられるように、その営みの中に違和感やしっくりとしたなじまなさを感じる場面があったこともわかった。

「つなぐ」営みの二つ目が、「紡ぎ直し」の営みである。紡ぎ直しとは、語り部や聞き語りに代表されるように、語る行為に重きを置く営みである。ここで特徴的なのは、語るという行為が、他者の存在や、その時の自分の考えで変わっていくように、紡ぎ直しの営みにおいても、その都度語りが調節されているということである。また、紡ぎ直しの主体はそれぞれの住民によるため、紡ぎ直しの営みの総体としてでてくるローカル・アイデンティティは、住民の数だけ多様であるといえる。

また、本稿で見た紡ぎ直しの営みは震災後に新たに始められたものである。前述のゆりあげ港朝市や関上太鼓、地区民運動会は震災前から主体や活動内容・方法が確立されており、比較的明確に活動の筋道を立てることができたといえよう。対して、語り部や聞き語り、関上復興だよりは、震災後に住民によって新たに始められた営みである。震災後の何重もの喪失の中から、立ち上がり、新たに行動を起こしていくことは決して容易ではない。その困難にもかかわらず、住民同士で語り合う場を持ち知恵を寄せ合い、外部から資金や活動運営などの協力を受け、紡ぎ直しの営みのきっかけをつくっていったことに、まず意義があると考

⁷⁹ p.52

えられる。

ここまで、震災前後で、津波被災地におけるローカル・アイデンティティ構築の営みはどのように変容したのかをみてきた。震災前後でその営みは喪失してしまったという語りも聞かれたが、その喪失を乗り越えるように「つなぐ」営みとして、ゆりあげ港朝市や地区行事に代表される「継続」されていく営みや、語り部や聞き語り、復興だよりに代表される「紡ぎ直し」の営みが現れていったといえる。

6-3. ローカル・アイデンティティの紡ぎ直しにおける「他者」と「物語」

本節では、地区住民によるローカル・アイデンティティの紡ぎ直しはいかにして行われ、続いていくのか、また、そこでは何が語られるのかについて考察する。

1) 紡ぎ直しにおいて語られる内容

第4章から5章にかけては、ローカル・アイデンティティの紡ぎ直しについて、詳しく見てきた。語り部・聞き語り・復興だよりの3つの事例を考察するにあたり、浅野の自己物語論における「他者」と「物語」（浅野 2001）に着目した。

ローカル・アイデンティティの紡ぎ直しにおいては、「他者」に誰を想定するのかで、語られる「物語」は変わるということがいえる。

例えば、語り部では、主に閑上地区外から訪れた観光客などを「他者」として想定し、その他者も共有しやすいよう、言葉を選びながら、自身の被災経験などの「物語」を語る。また、聞き語りでは、閑上地区の住民を「他者」として想定し、その他者が色濃く「私の閑上」を感じられるよう、閑上弁での会話をそのまま聞き語りの記憶として残している。

復興だよりについては、その紙面の内容も見ながら、何が語られてきたのかを考察した。復興だよりでは、震災復興の過程や住民の生活の変化にあわせながら細やかに記述し、「住民の声を届ける」「顔の見える新聞」として地区住民へと届けてきた。復興事業計画の中で見落とされがちだった地区に焦点を当てた「丘区の声」や、現地再建や復興事業計画に対する率直な意見など、震災後の住民の生の声が届けられた。

閑上地区の区画整理事業の事業計画が決定した頃には、「こんな計画はだめだ」という思いを、閑上地区のかつての生活の様子を彷彿とさせるような記事に込めて、「昔を振り返ることを取り入れよう」としたときもあった。しかし、基本的には、そういった閑上地区にまつわる復興事業計画などに、外部のNPOによる第三者的な記事づくりをすることで、地域紙として中立の立場でいることを心掛けた。そのため、復興だよりは住民にとって、自分の語りを他者と共有できる開かれた場所であったといえる。

2) 続いていく行為としてのローカル・アイデンティティの紡ぎ直し

ここでは、ローカル・アイデンティティの紡ぎ直しが、いかようにして続いていくのかを復興だよりを事例に考察する。

Eさんは復興だよりの第1号の発行から、第60号（最終巻）、そして現在の閑上だよりまで、常に活動に携わり、引っ張って来た存在である。復興だよりの発行を通じて「悩みとか、小さなことでも打ち明けてくれる」関係性を構築してきた。住民から電話などで直接、復興だよりの感想をもらうこともあり、そうした言葉がEさんの活動原動力となってきたと考えられる。

ローカル・アイデンティティの紡ぎ直しは、何かアクションを起こさなくても、日常の中での他者との会話などにおいて自然発生的に生じうるものなのかもしれない。しかし改めて「自分の生活する地域は、自分にとってどういう意味をもつのだろうか」と自己言及をするような機会は少ない。また、問いかけたとしても、それを共有する他者がいなければ、物語として紡がれにくく、言語化されないままとなる。

その中で、復興だよりにおけるローカル・アイデンティティの紡ぎ直しは、自己言及のきっかけを与えたり、物語を他者と共有する場を用意する営みだといえる。特に、閑上復興だよりでは、60号の発行を通じて、多くの地区住民を巻き込みながら、読者それぞれに対して「自分にとっての閑上」を考えるきっかけを与えた。また、他の住民の物語を知る機会を通じてまた自分の物語も紡ぎ直していく場としての特徴がある。こうした、他者との物語の共有を通じて、また自分にとってのローカル・アイデンティティが紡ぎ直されていく側面を有する。また、それらの語りは、記事の形で言語化され、その時々自分や他の地区住民が、閑上地区を認識していたのか、閑上地区やそこでの自己の生活などをどのように語ったのかという記録として残されていく側面も有する。そういった点に、復興だよりがローカル・アイデンティティの紡ぎ直しにおいて持っている意味を見出すことができるであろう。

6-4. 〈復興〉におけるローカル・アイデンティティの紡ぎ直しの意義

最後に、ローカル・アイデンティティの紡ぎ直しは被災地の〈復興〉において、どのような意味を有するのか、考察していく。

東日本大震災の被災地での復興においては、ローカル・アイデンティティの再構築が重要だとされている。例えば、大矢根は「地域アイデンティティ」という表現で「復興とは地域アイデンティティ再構築のプロセスそのもの」だという（大矢根 2012）。だが、具体的にはローカル・アイデンティティ再構築のこういったプロセスを復興だといえることができるのか。本稿では、さらに絞って、ローカル・アイデンティティの紡ぎ直しが住民主体の〈復興〉に対してどういう意味を持つのかを考察したい。

津波被災地においては、これまでも言及した通り、履歴が積み重なる空間としてのふるさとを喪失したことで、そうした履歴をたどることができず、自分の存在を知り得ない／語り

得ないという場合が生じる。それに際し、ローカル・アイデンティティは紡ぎ直すという行為を通じて、自分と地域の物語、翻って自分の物語を語り直そうとしてきた。それは、震災から時間が経過する中で、段々と自分になじむように、紡がれていく言葉である。それによって、震災後の生活の変化で感じた喪失や違和感に対して、説明しうる言葉を獲得していくのである。そういった意味で、ローカル・アイデンティティの紡ぎ直しも一種の〈復興〉のプロセスだといえよう。

東日本大震災から10年が経過する現在において、ローカル・アイデンティティの紡ぎ直しは〈復興〉に対してどのような意味をもつのだろうか。

渥美が、阪神・淡路大震災から10年後の時点において「語るに語り得ない、言葉にならない想いを語り伝える必要」があるとした一方で、その語り得ないものを覆い隠すドミナントストーリーが存在することを指摘するように（渥美 2004）、震災から時間が経つがゆえに、大きな主語によって構築されるローカル・アイデンティティへと集約されていく恐れがある。

閑上地区においても、「新しい閑上」や「観光地化する閑上」としてのローカル・アイデンティティの色合いが段々と濃くなっている。復興に関しては、Eさんが「よかったね、復興して」という読者からの反応をもらったことや、2020年に名取市が復興達成を宣言したことなど、だんだんと「復興は完了した」という物語ができつつあるといえる。

住民によって語られたローカル・アイデンティティは、ともすれば大きな主語によって構築されるローカル・アイデンティティによって見えづらくなってしまう。しかし、個々人が自己と地域の物語を通じて紡ぎ直すものこそ、それぞれの生の固有性をもつローカル・アイデンティティだといえる。紡ぎ直しの営みを継続していく中でそうした生の固有性をもつローカル・アイデンティティが履歴として空間に蓄積していく。そうした、住民それぞれが生き生きした物語を通じて紡いだローカル・アイデンティティが履歴化していくことで、再び「生きられた空間」として、立ち現れていくのだと考えられる。

しかし、そうした紡ぎ直しの営みがずっと意識されるわけではない。Eさんが「普通のまちに」なったら閑上だよりの発行をやめると話すように、様々な他者を巻き込んで行われてきた紡ぎ直しの営みが終わりを迎えると、ローカル・アイデンティティを言語化して、語ろうという意識も薄れていくだろう。

ここで、原田隆司が阪神・淡路大震災の被災地での聞き語りを通じて、震災の経験が「いろいろあった歴史の中の1つの出来事」という状態に相対化されていくとしたことに着目したい（原田 2016）。本稿のヒアリング調査でも、震災のことだけでなく、その人自身の生い立ちや、閑上地区での生活などの語りが自然と聞かれた。震災だから特別ということではなく、自分の人生の中の一つの出来事として語られていくのである。

つまり、自己と地域の物語、自己の物語を紡ぎ直し続けていく中で、ある種の日常に戻っていくことや、喪失などに対する葛藤がおだやかになっていくことを意味するのかもしれない。

ない。ただそれは、震災を契機とした喪失を忘却する、ということではなく、自分の中で受け入れ、理解をしていくプロセスである。

「自分にとって今現在の閑上がどういう場所なのか」。震災やそれによる喪失をよけてとおるのではなく、受け止めて、語る意志をもつ。自分にじっくりくる物語として言葉を紡ぎ、語ることができた場合、それもまたひとつの〈復興〉だといえる考える。震災から時間が経過する中で、大きな主体の物語に集約されやすい状況があるからこそ、津波被災地における住民によるローカル・アイデンティティの紡ぎ直しに意味があるといえるだろう。

6-5. 研究の課題と今後への展望

本稿のおわりにかえて、本稿の課題と今後への展望をまとめたい。

まず課題の一つとして、本稿ではローカル・アイデンティティの紡ぎ直しにおいて、集合的なもの、集合レベルのローカル・アイデンティティが構築されていくプロセスまで仔細に記述・考察できていない点がある。個人の語りや記述を分析し、それらが何を語ろうとしているのか、また、そうした個人それぞれの紡ぎ直しが〈復興〉において意義を有するとしてきた。しかし、それらがどのように共有され、集合的な物語が紡がれていき、結果として、それが被災地の〈復興〉にいかなる意味を有するのかを明らかにするには、例えば、住民同士の話し合いの場での参与観察や、聞き語りや復興だより・閑上だよりの読者へのさらなるヒアリングなどが必要であろう。したがって、本稿でみてきたローカル・アイデンティティの紡ぎ直しは、大堀のいう個人レベルにより着目しているといえる。

またもう一つの課題として、ヒアリング対象者にやや偏りがあり、若い世代の住民や震災後に新たに移り住んだ住民の語りを十分に取り入れられていない点がある。閑上地区の漁師町としての最盛期を知る住民にとっては、震災後の「新しい閑上」は距離を感じるものかもしれないが、新たに移り住んだ住民にとってはその「新しい閑上」こそが、自分と閑上地区の物語のルーツたるものである。むしろ、そうした新たに移り住んだ住民が閑上地区について語る場はあるのだろうか、彼らの物語はドミナントストーリーによってより見えにくいものになっている場合もありうる。集合的なローカル・アイデンティティの紡ぎ直しを考えた場合に、震災前・震災後の姿を、住民の世代、居住年数に関わらず共有できるような場・営みがあることで、より、いま・ここの閑上地区のローカル・アイデンティティが豊かに紡がれていくのではないだろうか。

ただ、今後への展望として、本稿では観察しきれなかった、もしくは記述しきれなかったが、閑上地区において住民による活動や、学校や公民館などを拠点とした活動を介して、そうした世代を超えた場・営みがつくられていることも事実である。例えば、閑上小中学校では閑上学という総合的な学習の時間のカリキュラムを通じて、生徒・児童が主体的に地域を学び、時には住民が講師となって授業を行うなどの試みが行われている。閑上だよりを発行するふらむ名取では、地域紙の発行にとどまらず、イベントなどの開催を通じて、多世代と

の交流を図っている。閑上地区に根付いてきた営みが基盤となって、新たにそうした場・営みが生まれていると考えられる。

ローカル・アイデンティティの紡ぎ直しは、不断に行われる営みである。〈復興〉にとどまらず、住民によって「生きられた空間」としての豊かなローカル・アイデンティティが紡がれ、共有されていくことの意味を今後も考えていきたい。

参考文献

【事例地関連資料（行政関係資料及び地域住民作成資料など）】

- 荒川節子，2013，『おなご五十集の話』，丸善仙台出版サービスセンター
- 大脇兵七，2016，『好きです・閑上 伝えておきたい私の記憶（太平洋戦争前後の閑上での生活）』，大脇兵七
- 岡崎一郎編，1977，『閑上風土記』，小野晋平
- 名取市，2011，「震災復興計画」
- 名取市，2011，「震災復興に関する意向調査結果」
- 名取市，2015，「名取市における東日本大震災の概要」，2020年12月5日閲覧，
<https://www.city.natori.miyagi.jp/soshiki/soumu/311kiroku/index>
- 名取市，2017，「震災復興計画 改訂版」
- 名取市，2020，「名取市復興達成宣言」（2020年12月30日閲覧，
https://www.city.natori.miyagi.jp/soshiki/kikaku/seisaku/node_66855）
- 名取市，2020，「名取市第六次長期総合計画」
- 名取市図書館，「名取市震災アーカイブ」，2020年12月6日閲覧，
<https://lib.city.natori.miyagi.jp/libarc/homes>
- 名取市図書館，「名取デジタルアーカイブ」，2020年12月6日閲覧，
<https://lib.city.natori.miyagi.jp/311arc/homes>
- 名取市史編纂委員会，1977，『名取市史』，宮城県名取市
- 認定NPO法人ロシナンテス，「閑上復興だより」，（2021年1月5日閲覧，
<https://www.rocinantes.org/activity/japan/tohoku/yuriage/>）
- 早坂泰子・河井隆博、小野和子，2014，『「閑上」津波に消えた町のむかしの暮らし』，早坂泰子
- 復興庁，2019，「公共インフラの本格復旧・復興の進捗状況（令和元年6月末時点）」
（2020年12月30日閲覧，https://www.reconstruction.go.jp/topics/main-cat1/sub-cat1-2/20190830_FukkoShihyo.pdf）
- 宮城県，2016，「貞山運河（木曳堀，新堀，御舟入堀）について」（2020年12月30日閲覧，<https://www.pref.miyagi.jp/uploaded/attachment/284356.pdf>）
- ゆりあげざっこ写真会，2011，『むかしの写真集 閑上 大切なふるさと 懐かしい町並み』，鈴木善雄

【参考文献】

- 赤坂憲雄, 2012, 『3・11 から考える「この国のかたち」 東北学を再建する』, 新潮選書
- 赤坂憲雄・鶴見和子, 2015, 『地域からつくる 内発的发展論と東北学』, 藤原書店
- 安達智史, 2012, 「リベラルな多文化主義における文化とアイデンティティ ―再帰性、エージェンシー・モデル、自律性―」『社会学評論』 63(2), p.274-289,
- 浅野智彦, 2001=2005, 『自己への物語論的接近 家族療法から社会学へ』, 勁草書房
- 浅野智彦, 2005, 「物語アイデンティティを越えて？」上野千鶴子 編『脱アイデンティティ』第二章 p.77-101
- 渥美公秀, 2004, 「語りのグループ・ダイナミクス：語るに語り得ない体験から」『大阪大学大学院人間科学研究科紀要』 30 p.160-173
- 内田龍史, 2019, 「宮城県名取市・岩沼市における住環境の復興過程」吉野英岐・加藤眞義編著, 2019, 『震災復興と展望―持続可能な地域社会を目指して』 p.157-178, 有斐閣
- 上野千鶴子編, 2005, 『脱アイデンティティ』, 勁草書房
- 浦野正樹, 2016, 「震災をめぐる土着と流動―地域アイデンティティの存続・継承と再編をめぐって―」『日本都市社会学年報』第 34
- NHK スペシャル取材班, 2013, 『巨大津波 その時ひとはどう動いたか』, 岩波書店
- Erikson, 1959=1973, Identity and the life cycle (=小此木啓吾訳編, 1973, 『自我同一性：アイデンティティとライフサイクル』, 誠信書房)
- 大堀研, 2010, 「ローカル・アイデンティティの複合性―概念の使用法に関する検討―」『社会科学研究』 61 巻 5-6 号 p.143-158
- 大堀研, 2011, 「自治体戦略としての「ローカル・アイデンティティの再構築」」『社会学年報』 No.40 p.23-33
- 大堀研, 2017, 「被災地 釜石の住民活動 ―NEXT KAMAISHI のケース・スタディ」吉原直樹・似田貝香門・松本行真編著, 2017, 『東日本大震災と〈復興〉の生活記録』 p.560-580, 立花出版
- 大矢根淳・浦野正樹・田中淳・吉井博明 編著, 2007, 『災害社会学入門』, 弘文堂
- 大矢根淳, 2007, 「生活再建と復興」大矢根淳・浦野正樹・田中淳・吉井博明 編著, 2007, 『災害社会学入門』 p.152-158, 弘文堂
- 大矢根淳, 2012, 「被災へのまなざしの叢生過程をめぐって——東日本大震災に対峙する被災地復興研究の一端——」『環境社会学研究』 No.18 p.96-110

- 桑子敏雄, 1999, 『環境の哲学』、講談社
- 桑子敏雄, 2005, 『感性の哲学』、日本放送出版協会
- 片桐雅隆, 2003, 『過去と記憶の社会学 自己論からの展開』、世界思想社
- 黒田由彦, 2014, 「東日本大震災：復興の課題と地域社会学」『地域社会学年報』第 26 集
- 小泉秀樹, 2015, 「復興とコミュニティ論再考 連携協働復興のコミュニティ・デザインにむけて」似田貝香門・吉原直樹編, 2015, 『震災と市民 1 連帯経済とコミュニティ再生』第 8 章 p.159-181, 東京大学出版会
- 酒井俊史・村尾修, 2019, 「2011 年東日本大震災後の名取市閑上地区における震災復興まちづくりの計画策定過程」『公益社団法人日本都市計画学会 都市計画報告集』No.18: p.58-63
- 清水亮, 2008, 「〈居住の論理〉に基づくコミュニティ形成」似田貝香門 編著, 2008, 『自立支援の実践知 阪神・淡路大震災と共同・市民社会』6 章 p.157-203, 東信堂
- 高倉浩樹・瀧澤克彦, 2013, 「東日本大震災に伴う被災した民俗文化財調査」p.81-87, 東北大学東北アジア研究センター (2020 年 6 月 18 日閲覧, <http://hdl.handle.net/10097/57301>)
- 高橋祐紀・姥浦道生, 2012, 「震災復興計画策定初動期における住民組織の形成とその機能に関する研究 一名取市閑上地区を事例として」『公益社団法人日本都市計画学会 都市計画報告集』No.11: p.73-78
- 辻岳史, 2019, 「長期的災害復興におけるコミュニティ・ガバナンス—東日本大震災の津波被災地域を事例として—」, 名古屋大学大学院環境学研究科 博士論文
- 似田貝香門 編著, 2008, 『自立支援の実践知 阪神・淡路大震災と共同・市民社会』, 東信堂
- 似田貝香門・吉原直樹編, 2015, 『震災と市民 1 連帯経済とコミュニティ再生』, 東京大学出版会
- 沼田愛・赤嶺淳「大漁唄い込み踊にみる閑上のくらし」高倉浩樹・瀧澤克彦編, 2014, 『無形民俗文化財が被災するということ 東日本大震災と宮城県沿岸部地域社会の民俗誌』p147-156, 新泉社
- 日詰博文・永野聡・山田俊亮, 2017, 「東日本大震災におけるゆりあげ港朝市の復興過程と地域貢献に関する研究 一災害危険区域内の商業活動を構成する施設と組合の考察—」『日本建築学会計画系論文集』第 82 巻 第 741 号, 2865-2874
- 原田隆司, 『震災を生きぬく 阪神・淡路大震災から 20 年』, 世界思想社

- 宮本巧・渥美公秀，2009，「災害復興における物語と外部支援者の役割について ～新潟県中越沖地震の事例から～」『実験社会心理学研究』 第49巻 第1号 p.17-31
- 除本理史，2013，「福島原発事故における絶対的損失と被害補償・回復の課題 ―「ふるさとの喪失」と不動産賠償を中心に―」『経営研究』第64巻 3号 p.25-41
- 除本理史，2019，「原発事故被害者集団訴訟7判決と「ふるさとの喪失」被害」『経営研究』第69巻 3-4号 p.17-32
- 吉原直樹・斎藤日出治，2011，『モダニティと空間の物語』，東信堂
- 吉原直樹，2011，「いま問われる「地域社会の再生」とは」『社会学年報』No.40 p.1-5
- 吉原直樹，2015，「帰属としてのコミュニティ 原発被災コミュニティのひとつのかたち」似田貝香門・吉原直樹編，2015，『震災と市民1 連帯経済とコミュニティ再生』10章 p.207-225，東京大学出版会
- 吉原直樹・似田貝香門・松本行真編著，2017，『東日本大震災と〈復興〉の生活記録』，立花出版
- 吉原直樹，2011，「いま問われる「地域社会の再生」とは」『社会学年報』No.40 p.1-5
- 吉原直樹・山川充夫・清水亮・松本行真編著，2020，『東日本大震災と〈自立・支援〉の生活記録』，立花出版

フィールドワーク記録

日付	名前	属性	性別・年代	備考
2017年4月30日	Mさん	閑上出身、公民館長（当時）	男性・60代	※1
2018年3月3日	Tさん	閑上中学校教頭（当時）		※1
2019年12月13日	Fさん	閑上出身、運送業		IF
2019年12月13日	Aさん	閑上出身、語り部	男性・70代	
2019年12月13日	Bさん	閑上出身、語り部	男性	
2019年12月13日	Kさん	閑上出身、語り部	女性	
2019年12月13日	Eさん	閑上出身、ふらむ名取代表	男性・60代	
2019年12月14日	Aさん			
2019年12月14日	Bさん			
2020年7月15日	Fさん			
2020年7月16日	Gさん	閑上出身、医療業		
2020年7月17日	Eさん			
2020年10月6日	Rさん	閑上で育つ、みやぎ民話の会	女性・80代	
2020年10月8日	Hさん	閑上出身、ハマボウフウの会代表	男性・70代	
2020年11月15日	Lさん	閑上出身、漁港関係者	男性	IF
2020年11月15日		お茶のみ場	地区住民5名	IF
2020年11月15日	Nさん	公民館職員	女性・30代	IF
2020年12月18日	Eさん			
2020年12月19日	Oさん	閑上出身、宿泊業	男性	
2020年12月19日	Eさん			
2020年12月25日	Tさん	閑上小中学校校長		※2

IF：インフォーマルインタビュー

※1：早稲田大学社会科学部卯月ゼミナール在籍時（フィールドノーツの引用）

※2：早稲田大学社会科学部卯月ゼミナールと、オンライン上にて合同で実施

謝辞

本研究を行うにあたり、多くの方々にお世話になりました。

まず、指導教官の清水亮先生には、2年間にわたり丁寧にご指導いただき、ありがとうございました。自らの研究のこだわりが何なのか、なぜそこにこだわるのか。それを考え、言葉にしていく過程に頭を悩ませつつも、先生のご指導があったからこそ研究として一つの形にすることができました。先生から頂いたいくつもの言葉が思い出されますが、現場の住民の声に寄り添いつつも、「クールな視点」を忘れない、ということが非常に心に残っています。この言葉を頂いて以降、一研究者としてフィールドワークにあたる心構えがついたように思います。

副指導教官の福永真弓先生には、異なる角度から多くの助言をいただきました。特に、先生の三陸での調査のエピソードを伺う中で、自分が気づきえなかった視点からフィールドを多角的に捉えることができました。「修論では自分の思いをたんまりと書く」という先生のアドバイスを胸に、拙いながらも自分の言葉を紡いでいくことができたと思います。

清水研の皆さんには、研究の内外でお世話になりました。毎週のゼミでの皆さんとの議論から学びと刺激をもらっただけでなく、研究室での時間やゼミ合宿など、この2年間を楽しく過ごせたのは、清水研の皆さんのおかげでした。福永研の皆さんも、数々の相談に乗っていただきありがとうございました。この1年、文系院生室に集まって、議論や歓談をする時間が少なかったことだけは心残りです。

また、関上地区に出会うきっかけをくださった、早稲田大学社会科学部の卯月盛夫先生にも感謝申し上げます。学部時代の卯月ゼミでの経験がこの研究の基盤となりました。在籍時のご指導だけでなく、卒業後も活動に参加する機会を頂くなど大変お世話になりました。

そして何より、これまでお世話になった関上地区の皆さまに、心より感謝申し上げます。特に、今年度に関しては、東京から長距離の移動もはばかられる中、ご迷惑をおかけした部分もあるかもしれませんが、快く対面やオンラインでのヒアリング調査にご協力いただき、ありがとうございました。関上地区を訪れて見たことや感じたこと、そして、そこで聞いた皆さまの言葉一つ一つが、私の研究の一番の原動力となりました。これからも自分にできる形で、関上地区のこれからを見つめ、考え続けていきます。

最後に、これまでの学生生活を一番近くで支えてくれた家族に、感謝の気持ちを述べたいと思います。ありがとうございました。

2021年1月 鳥居真実子